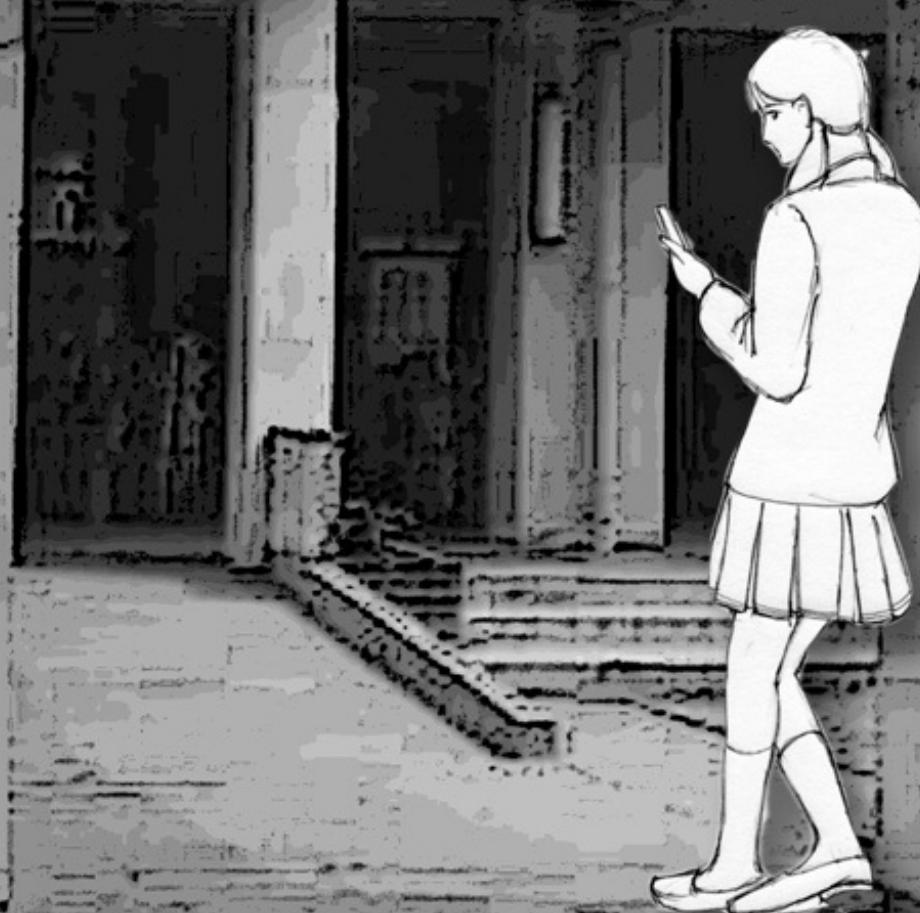


Negatives



六月には珍しくお天気のいい土曜日。公園通りのオープンカフェは、からっとした夏風が吹いて気持ちいい。とかいいながら、アイスティ一杯でもう一時間近く話し込んでいる。

「でさー、結局親に見つかっちゃって、あとでこってり絞られたよ。長い受験の冬が終わって、やっと春から夏へってときに、勉強なんかするわけないって。もうテストは当分いいでーす。」「先生らもねー、その辺さっして欲しいよね。」

「アミって、中学の時の彼と別れたんだってー。」

「だれそれ？」

「うわ、やばくない、それって。薄情ー。」

「いまはキョウヘイ・ラブだしー。」

「バンドやってんだよね、いいなー。ワタシもカレシ欲しー。」

確かにアミは目立つし、可愛い。高校デビューと同時に髪にウエーブをかけ、すこしダークチエリーに染めた。ちょっと化粧もしてる。

わたし達四人組の中でも一番もてるし、三ヶ月に一度ぐらいはカレシ入れ替わってる。いまの、キョウヘイって、確か二年の人だ。

私なんて、髪の毛の面倒見るのじゃまくさいから両方にひつつめにしている。それにメガネがないとなーんにも見えない。

人間てぜーんぜん平等じゃない。っていうか、この地味な私がどうしてこのグループに居るのか、よくわかんない。

パシャッ！

なに、いまの音。

「おい、てめー、なに撮ってんだよー！」

「ごめんなさい、つい。」

「なにが“つい”だよ。勝手に撮ってんじゃねーよ。消してわびいれろ！」

こわー。グリ、友達だと思ってても怖い。店の人も引いちゃってる。

「ごめん。でもこれ、消せないんだ。」

「消せないって、アタシでもデジカメの使い方ぐらい知ってんぜ。なめんじゃねーよ。」

「だから、これデジカメじゃないんだ。フィルムカメラなんだよ。現像してからちゃんと目の前で処分するから。」

なんだか、気が弱そうだな、彼。

「てめ、誰見て喋ってんだ。」

「いや、だから、撮っちゃったのって彼女だし。」

え、わたし？ アミちゃんじゃなくって、わたしなの。

「ツバキもなんかいってやりな。おとなしくしてたらツケアガルよ、こういうヒジョウシキなオトコ。」

えと。

「困ります。勝手に写真とか撮られたら。」

困るけど、一人じゃ言えない。怖くって。

「すいません。本当に押しちゃったんで、ちゃんと処分します。・・・そうだな。学生証預けとくんで。これと引きかえって言うことでどうですか。現像に二日ぐらいかかるから、あさつての夕方ぐらいには。」

あ、グリにひったくられた。

「これって、うちの学生証じゃん。しかも一年。こんなやついたっけ。Eグミ、ふーん。これなんて読むの。」

「越名 瞳月。こしな むつき。」

「読みにくー。」

「キミは？」

やっと出番だ。

「C組。長内 椿。」

「明後日には必ず。僕も学生証ないと困るから。」

「約束やぶんなよ。もし破ったら、学校にいられないようにしてやるからな。」

グリがどうやれば、彼が学校に居られなくなるのかは知らないけど、居てくれて助かった。私一人だったら、そのまま泣き寝入りして、いつか忘れてしまってただろうな。

行っちゃった。まあ、普通の神経だったらいたまれなくなるよね。私は慣れたけど。

でも、

「どうして、アミちゃんじゃなくて私なんだろう・・・。」

アミちゃんだったらなんとなく納得。私みたいな地味なのとて何が嬉しいの。“つい”、とかいってたけど、、、そういえば音がするまで全然気がつかなかつた。結構大きなカメラだったし、割と近かったから、いくらおしゃべりしても気がつくよね。じつと構えられたら。

「さあね。どうしてかな。でも私はツバキの顔好きだけどね。子供のときからずっと。それにしてもアイツ。何か見覚えが・・・。」

まさか。アミちゃんの趣味じゃないでしょ。

「ああ、」

って、ミノリ？

「思い出した。あいつ、たしか“口バ”ってあだ名だった。」

「“口バ”？ だっさー。」

「普通そういうあだ名ありえなくない？ だからなんとなく覚えてたんだ。選択科目が同じなんだよ。でも、あだ名以外に全然特徴ないやつなんだけどね。」

選択科目で目立つ人って居ないよ、ミノリ。

「フィルムカメラって何？」

「ほら、親とかのアルバムって見た事無い？ ああいう写真てフィルムを使って撮ってたんだよ。」

？？？アミちゃん、どうしてそういう事知ってるの。

「ああ、紙でしか見れないやつ。」

？？？、私だけ？

「口バめ。案外簡単に引き下がったな。」

「とろそう。」

グリひどい。笑っちゃう私も酷いけど。

「とろりん？」

「ろばろば。」

その彼のどこが“口バ”なのかよくわからない。そしてもう一時間ぐらいそこで話しこんでいるうちに、わたしは、そんなことがあったことすら忘れてしまった。

彼の学生証を、鞄に放り込んだまま。

その次の日は何事もなく過ぎて、そんなことがあってから二日後の放課後がやってきた。

六時間目の授業が終わって、私は教科書とノートを鞄に詰めなおし、家に帰ろうとしていた。わたしはどこの部活にも入っていない。いわゆる帰宅部なのだ。

「長内さんいる？」

だれ？ 入り口？ だれ？

「あ、長内さん。」

誰だっけ。

「え、忘れたの。越名。こしな むつき。」

あ、「口バ。」

「ふつ。そうそう。よく知ってるねそんな名前。この間のあれ、処分しに来たんだけど、時間ある？」

「ここで？」

どきどきどき、、、。なんて言うか、男の子と面と向かって話すのって小学校以来だよ。

「いや、いまここには持っていないんだ。教室においてある。E組の。こっちに持つて来ればよかつた。」

さっさとすませたいな、こんなこと。

「いいわ、行くわよ。E組。」

私、ちょっと大胆。かな？

ちょっと距離置いてついていこうっと。いっしょだと思われると、なんかやだ。

「じゃあ、ええっと。」

彼は鞄の中に手をいれ、白っぽい紙袋を取り出した。その袋からあまりかさ高くないケースを取り出して、そのふたを取ると、中のカードを一つ一つ、つまみ出した。

写真だよね？ フィルムとか言ってたけど。小さくない？

「確か三十番ぐらいだったと思うんだよ。」

なんて、独り言を言いながら、途中から一枚一枚窓の外に向けてみている。

「何してるの？ っていうのかそれって一体何？」

「これはスライド。この中に写真が写ってるんだ。」

その小さいところに？そんな小さな写真なんて、何か意味有るの？

「ほら、見て。」

あ、ほんとだ。写ってる。

水溜り？ 空？ 地面？ すごいきれいな色。こんなにきれいな色初めて。ブルーって言うか、ちょっとコバルト色がかかる。

「雨上がりだったでしょ。水溜りがまだ残ってて、よく見ると空なんか映ってるんだよ。」

そっか、そういうの見た事あるかも。ずっと昔に。

こんどは、え、何これ？

「小さくて見えにくいけど、ブロック塀の飾り穴の向こうから犬が覗いてるんだ。退屈そうな顔でね。」

本とだ、面白い。

「これは？」

「道路の側溝に網目のふたがあるんだけど、底の方から露草が伸びてきて、それを出来るだけ横から撮った。

次はね、桜の葉。光が透けて黄緑がきれいだろ。

そして、次がキミの写真だ。僕は普通、女の子は撮らないんだよ。」

あ、ホントだ、私だ。

「右肩に通し番号が打たれてるでしょ。29番が桜の葉、30番がキミの写真。で31番はビルとビルの間の細い隙間。猫ぐらいしか通れないよね。でも向こうに何かある。

このカッターで切れば、もう写真としては機能しない。キミが切る？」

「・・・もったいない。」

うわ、なに言ってんだろう私。でも、これ、見づらいな、もう少し大きくならないだろうか。っていうか見てみたい。なんだか、私の知ってる私じゃないような気がする。

いくら窓の方に向けても、みにくいか。

「本当はね。投影機に入れて、壁なんかに映して見るんだけどね。・・・見たい？」

こっくり。

「部室に行けば、何とかできるけど・・・。」

部室―――。

「ロバ。邪魔してわりー、これ写真集サンキューな。おれ、もう部活に行くし。」
やっぱりロバって呼ばれてるんだ、彼。

「ああ、どうだった。」

「お前が言ってた通りだよ。キャパってすげーな。すごい迫力のある写真で、映画のカット見てるみたいで、ビックリした。」

「ああ、オレが尊敬する唯一のカメラマンだからな。」

キャパ？

「どうする。部室で見る？」

こっくり。私、てんばると無口になる。



「これって、本当は写真を印画紙に焼くための機械で、こういうことに使うんじゃないんだけど。スクリーンの代わりに白い紙をひいて、キャリアにフィルム挟んで、スイッチいれると……。」

あ、台の上にぼーっとなにか写ってる。でも、印画紙って、紙っていうぐらいだから写真の紙のことだよね。あれって、焼き付けるものなの？
焼くって、燃えたりしないのかな。これで燃やすの？

「ちょっと暗幕引くね。」
明るくなった。じゃなくて、周りが暗くなったからそう見えるのか。

「こうしといて、ピントを合わせると。これぐらいかなー……、どう？ 見えるでしょ。」

これ、わたし！ わたしじゃないよ、これ！
でも、わたし。
わたし、こんなに可愛くない。
でも、わたしつぽい。
……どうして、こんなふうに写せるの。信じられない。
ねえ、口バくん、どうして？

「いい写真だ。自分でいうのもなんだけど、よく撮ってる。前後の人気が少しほけてるのもいい味でてる。やっぱ80ミリはいいボケ味が出るな。」

ボケアジ？ 何のことかわからないけど。

「やっぱ、処分する？ このポジ。」

ふるふるふる。とてもそんなこと出来ない。写ってるのは私だけど、私じゃないみたい。

「さっき、女の子は撮らないんだって言ってたよね。」
「うん。他のもちょっと見てみる？ 今回はわれながら、よく撮れてると思うんだ。雨の合間に街に出て、次いつ撮れるかってテンションあげて歩き回ったのがよかったです。」

この洗濯物、シーツ？ 風にあおられて空に飛んで行きそう。あ、標識の影ながーい。この道こんなにくねくねしてたっけ。

ねえどうして？ これって、どうしてこんなこと起こるの。

「全部この街の写真だよね。」

「そうだよ。」

「全然違う街に見える。同じように毎日歩いてる街なのに、全然違って見える。どうしてなの？」

「同じ街？ そうじゃないよ。同じ街なんてありえないよ。街って一分一秒で変化していくんだよ。太陽はどんどん昇って沈んでいくし、毎日角度も変わっていく。植物も伸びるし、一年経てば僕たちは年をとって、去年と同じように感じれるかどうかはわからない。」

君と僕だって、背の高さも違えば歩く速さも違う。同じ街なんて存在しない。あるのは、今の君の町、いまの僕の町。

キャメラマンの眼って、それを捉えるんだよ。それをこんなふうに、フィルムに焼き付けるんだ。」

すごい。言つてることがわたし達のレベルと違う。でも、なんとなく言いたい事が分かるのは、、、私が無意識に感じている事を、彼がちゃんと言葉にしているからだ。

この世界は不公平だ。でも、ただ単に不公平だって言うんじゃなくて、一人一人、違う世界に居るってことなんだよって、彼は言つているように聞こえる。

こんな人がどうして口バなんだろう。

「でも、それってすごく難しいんだよ。まず、考えてちゃ駄目なんだ。考える前に、何かを感じたらすぐシャッターを切らないといけない。でも本当の瞬間で、その一瞬後に来るかもしれない。それを捕らえるのって、やっぱ、直観を鍛えるしかないんだ。だから、カメラを持って街を歩き回って、そういう瞬間を追い求めてる。」

この写真一つ一つをどうして撮ったのかって説明は出来ない。何かを感じたからとしか言いようがないんだ。

だから、女の子を撮らないんだけどっていうのは、いわゆるそういう写真は撮らないってことで、街角で君を見たとき、何を感じたかはわからないけど、君を撮ったのは女の子を撮ろうと思ってシャッターを押したんじゃないってこと。」

ふーん。結構熱く語っちゃうんだ。意外。そんなふうには見えなかったな。

最後のところは何言ってんだって感じだったけどね。

よーし。

「この写真貰っとく。それと、これとこれも。」

「えー、そんな約束してないぞ。」

「迷惑料。わたし、結構傷ついたんだからね。」

ううそ。で、大胆。われながらびっくり。

「それ言われると、つらいなあ。そうだよな、女の子だもんな。勝手に撮っちゃダメだよ。でも、スイッチ入っちゃうと、自分でも止められなくなるんだよな。まあ、僕を信用してくれたんだし。しょうがないか・・・。」

ちょっと良心が、ちくちく。

「学校にこんな部屋があるなんて知らなかった。それに、どうしてあなたが鍵なんか持ってるの。」

口バくんが、真鍮の鍵をかちやっとまわして閉めた。ちょっとお酔くさかったな。制服ににおいてたらどうしよう。くんくんくん。

「ん？ 暗室のこと？‥‥ここ写真部の部室兼暗室なんだ。」

そんな部活あったんだ。初耳。

「いまのところ、部員は僕一人。だから僕が鍵を持ってるってわけ。いちいち職員室に返しに行くの面倒だし、誰もチェックしていないみたいだから。」

「一人なんだ。」

「去年の三年生が卒業して部員ゼロになって、廃部寸前だったんだけど先生に頼み込んで猶予期間を置いてもらったんだ。でも九月になって、五人集められなから廃部決定。」

「そうなんだ。」

「写真撮ったり焼いたりするだけなら、一人でも出来るんだけど。将来はキャバみたいなプロのキャメラマンになりたいんだ。」

だったら、撮るだけじゃなくて、人に見てもらって、人の評価も聞かないとね。独りよがりな写真で、アマチュアどまりだろ。だから、学校でちゃんと活動して、文化祭とかにも出したいんだよ。」

将来か。わたし達がテストなんてもう嫌だーって、だべってる間に、彼は将来のこと考えて街を歩き回ってたってことね。

「学生証、返してくれる？」

「あ、忘れてた。家の鞄に放り込んだまま。」

やっぱー。

「‥‥傷ついたっていうの、あれ、嘘？」

こういう時って、廊下長いんだよねー。どうやってごまかそうかなー。‥‥だめだー、なにかいい言い訳思いつかない‥‥。誰か助けてー。

「ツバキ遅い。あ、ろばオトコ。」

「僕は口バであって、ろばオトコじゃない。失礼だなキミは。」

「どっちだっていいだろ。それよりツバキに何してんの。ツバキ、襲われなかつた？」

「アミちゃん大丈夫だよ。変なことはされなかつた。」

しまつた、微妙ないい回ししちやつた。ごめん口バくん。キミは悪くないよ。

だから、アミちゃん睨まないで。へへつ。

「学生証返してくれないと困るんだけど。各種学割使えなくて。映画とか。」

「映画見るの。」

「映画って、すっごい参考になる。スチルと違つて動くんだけど、でも、構図のうまさとかって刺激になるよ。」

「ストーリーは？」

恋愛映画とか、見ないタイプかもしんないな。

「もちろんそれもだけど。」

「ツバキ一、早く帰ろうよ。」

「じゃ、明日は必ず持つてくるから。フィルムありがと。」

「ツバキ一。」

ごめん、口バくん。

「さっき、何話してたの。」

「写真のこと、いろいろ。あんまり覚えてないけど。彼、写真部なんだって。」

「写真部？」

写真部って、そんなに印象悪いの？

・・・そうだ、これ聞いてみよ。

「アミちゃん。この街ってさ、毎日違うんだよ。」

あれ、上手くいえてないな。こんな簡単な話じゃなかつたぞ。

「そうだね。昨日の街と、今日の街がとても同じとは思えないわ。パラレルワールドとまでは言わないけど、すべて形あるものは時間の経過とともに、徐々に崩壊していくものね。人の心もいつまでも同じじゃないし・・・。そういうこと考えると怖いよね。」

・・・・・・！ うっひゃー、びっくり。男の子しか興味ないのかと思ってた。

「なによその眼。確かに私はオトコオトコっていってるけど。それはそれ。付き合ってる男ってバカばっかりだけど、それもそれ。その方が気楽でいいの。」

「なんか、この三日ぐらいで私の人生って裏返ったような気がしてきた。オセロみたいにクロがシロでシロがクロみたいな。」

「ツバキはそんなこと考えちゃ駄目。私はツバキの保護者なんだからね。ぼーっとしてればいいの。」

わたしって、おバカキャラ？

「これもらっちゃった。」

「あースライドか。なるほどフィルム写真っていうのは、ホントだったんだね。」

ふーん、結構上手いな、あいつ。これ、私が好きなツバキの顔だ。これを一瞬で見つけたのか。

」

あ、興味有りそう。

「あと、ほら、こんなのも。」

みてみて、貰ったんだよ。いいでしょ。戦利品だよ。

「ちっちゃー。見にくい。でも、あーこれ・・・いいな。」

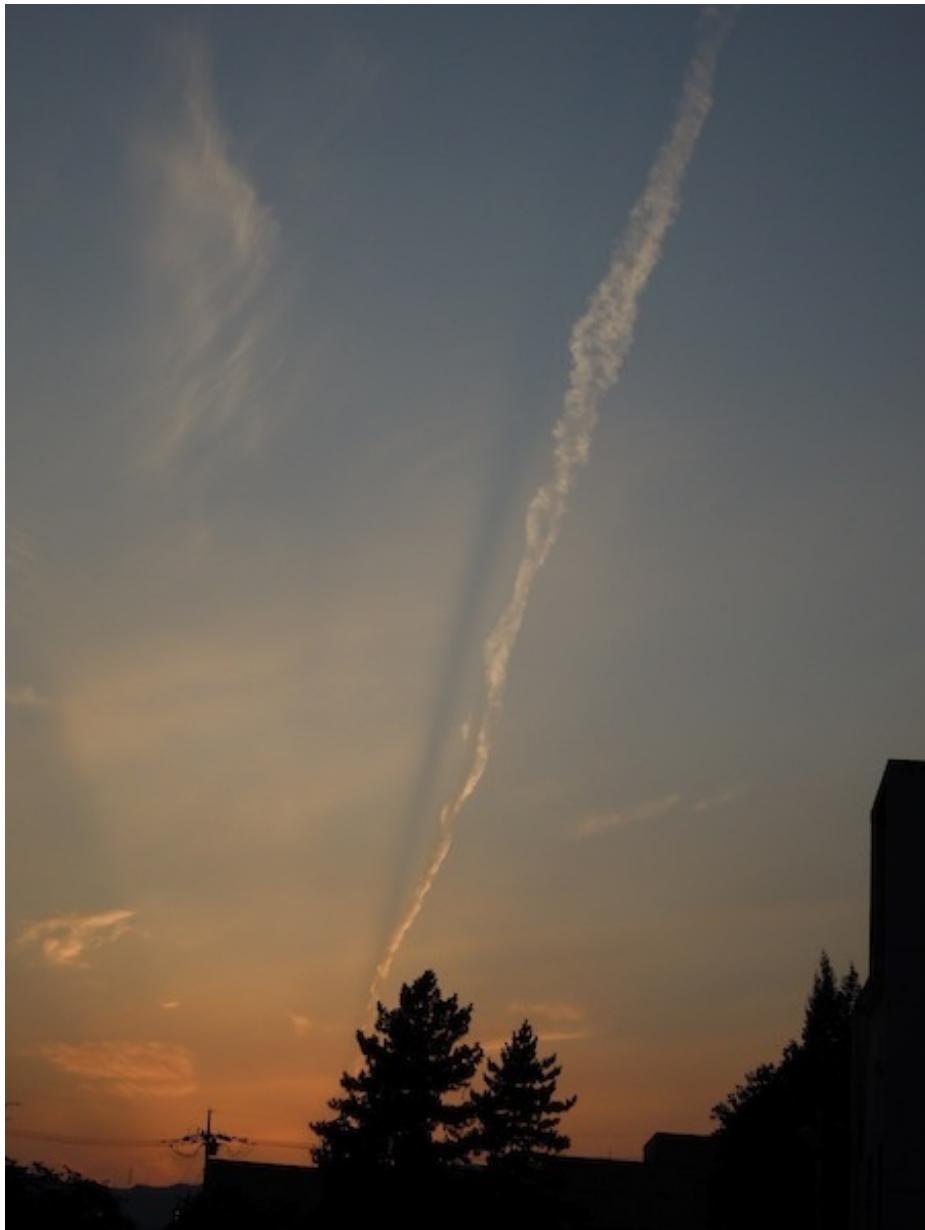
立ち止まっちゃった。

「こんな夕焼けあったんだ・・・このくそみたいな街に。」

きれいだよねー、それ。

「ずっきーん・・・。」

え。それって、どういう意味。



どの鞄だっけ、あの日持つて行ったの。お財布と定期だけ出してクローゼットにしまったはず。
。これかなー。よいしょっと。

なーかーを空けると、有つた有つた、、、って言うか、無かつたら私が焦る。

へー、こんな顔だつたっけ。

そういうば、今日、一時間ぐらい一緒にいたのに、まともに顔見れてないな。殆ど初対面の男子だから、恥ずかしくて顔まともに見られなかつたよ。よくよく考えると、二人っきりでの暗くて狭い暗室にいたなんていいうのも、びっくり。

でも、これ入学した直後の写真なんだろうな。もうちょっと髪長かったような気がする。へー、中学の時ってこんな顔だつたんだ。どこの中学かな。

アミちゃん的には全然いけてないんだろうな。アミのカレシってみんなイケメンで噂だから。
・・・私は、ちょっと可愛いかなって思う・・・。

きや————、なに言ってんの私。落ち着け。顔の温度がヤバい。

住所まで書いてあるんだあ・・・当然、私も書いてるけど。櫟町二丁目百二十五番地か。
櫟町ってそんなに遠くでもないのに、全然知らなかつた。あるいて十分ぐらいだよね。へー、そっか。市内だけど、多分、校区違うから知らなかつたんだ。

明日クラスに届けてやるか。めんどくさいけど、ちょっと会うの楽しみかも。

今まで、ほとんど男子と接点無かつたからな。近付いてくる男の子って、みんなアミ目当てだつたし。ま、わたしがオトコでもそうしたけどね。

越名くんか。睦月ってちょっと女の子みたいな名前だなー。一月ってことだよね。
押しつけがましいとことかないし、そういう意味では、わたしにとっては話しやすい相手かも。

何言ってんだろ。学生証返したら、もう接点無いですし。

・・・今、玄関のあく音がした。午前0：30。こんな時間に帰ってきたのかあ。
仕事、仕事って言つてるけど、どうせお酒飲んでるんだけなんだろうな。もう半年ぐらい喋つてないかも。嫌だな、あんなのと一緒に家に暮らすの。

お酒臭いのと、だらしない格好でうろうろしているのと、それ以外、もう思い出せない。

また、喧嘩してる・・・。聞きたくない。

もうやだ、こんな家。

「あのー、越名くんいますか？」

「コシナ・・・ああ、口バね。口バーお客様。」

放課後に渡すつもりだったんだけど、それまで持ってるのがちょっと心配になってきた。私つて見かけどおりの小心者。

だから、ホントはいまもどきどきしてる。よそのクラスに行くなんて。

アミちゃんかグリについてきて欲しかったんだけど、アミはカレシとお昼らしい。グリを連れたらまた大ごとになりそう。だから、ちょっとビビリながらも一人でやってきた。

たった2教室分なのにこれだものなあ。私って、ホント情けないよ。

「ういーす。」

「こんにちは。」

いけてないー。顔見れないー。

「これ、学生証。返す。」

「わざわざすんません。」

「わ、忘れてたのわたしから・・・。」

「サンキュ。じゃ。」

あ、終わっちゃった。あっけない。もうちょっとお話ししてもよかったです。

教室帰ろっと・・・、あんなにどきどきして・・・、がんばって一人で来たのに・・・、この小心な性格直したかったのに・・・あーあ。

「長内さん。」
「へ？」追っかけてきた。

「長内さんちょっといい？」
「なに？」
どきどき。学生証によだれでもついてたかな。昨日、あのまま机の上でしばらく撃沈してたから。

「なんか部活とかやってたりする？」
ふるふるふる。

「写真部入らない？ 最悪の場合、名前だけでもいいんだけどさ。
ほら、9月までに部員5人集めないと、本当に廃部でさあ。
最初は何とかなるかなと思ってたんだけど、6月になっても僕ひとりしかいなくて、7月8月
ってもう夏休みでしょ。もう、やばいんだよね。
キミが全然写真なんか興味なくって、そもそも部活なんかやってられっかーって思ってるんなら仕方ないけど、最近、女子でカメラ趣味にしてる人って多いんだよ。そういう人向けの雑誌も
出てるぐらいで……。」

「いいよ……。」
「はい？」

「入ってもいいよ。写真部。」
「おっしゃー！」
うわ、わたし、人からこんなに喜ばれたの初めて。意味もなく嬉しい。

「そのかわり、ちゃんと教えてね。写真のこと。」
「もう、任せて任せて。僕、写真のことだったらいくらでも語れるから。じゃ、今日の放課後からね。気が変わったとか無しだよ。」

写真オタクなのかな。オタクはやだな。オタクって、変な匂いしそうだもの。もし身の危険を感じたら、そのときはグリに助けてもらおうっと。

それはそうとして、……、うちカメラとかあったっけ。

、、、要るよね、やっぱり。

はあ・・・どっと疲れた。自分の机が一番落ち着くわ。
お昼休み、あと十分ぐらいしかない。お昼寝したかったなー。

写真かー。

「ツバキちゃん。ろばオトコと何喋ってたの。」
うーわ、アミちゃん、それもう名詞になってるし。で、どこで見てたの。油断も隙もないなあ。
「が、学生証返したの。それと、わたし写真部入ったから。」
ふつふー、進歩したでしょ。
「えー、なにそれ。ツバキってもう私と一緒に帰るのがいやになったのー。そんなのありえないー。ねえーツバキー。」

「アミちゃん、ショッちゅうカレシと帰ってるじゃない。」
「うわ、ツバキ反抗的。ふんだ！いいもーん、私はキョウヘイと帰るもーん・・・やっぱり、やだー。ツバキー、毎日じゃなくていいから、私とも帰ろうねー。」
なに言ってんだかー。

「アミちゃんも写真部入ったら。あと三人集めないと、廃部になっちゃうんだよ。」
って、もう勧誘してるし。私。
「ワタシ、撮られるのはいいけど、撮るのはメンドクサイ。・・・あ、でも、ろばオトコの写真は、ちょっと見てみたいかも。」

アミちゃんの意外な一面を見た気がした。
「人間て、見かけだけじゃわかんないねー。どこにどんな人間がいるんだか。」

プリクラとか、写メとか、そういうもの以外の写真に、人が全然写ってない写真に、興味を持つなんて想像もしなかった。

小学校のときからの友達で、お互いなんでも知ってるつもりだったのに、アミちゃんのこういうところ、気がつかなかった。
越名くんが言ってたな、同じものなんてないんだって。アミちゃんも、だんだん変わってきたってことかもしれない。



どきどきどきどき……。
どうして、ドア閉まってるのー。

どきどきどきどき……。

夏なんだから、開けてくれてればよかったのに。そうすれば風通しもよくなるし、あのお酢のにおいも消えるだろうし。

どきどきどきどき……。
ノックするの緊張するなー。2回だけ、3回だけ、せーの！

「よ、お待たせ。」
ひい——。この振り上げたこぶしの行き場はいったい。

「今、開けるから。」
中にいなかったの——。ありえないー。ワタシのどきどきを返せー。

「どうぞ、入って。暑くなるからドア開けとこうか。」
ちょっと狭いぞ。この前来た時はそんなふうには思わなかつたんだけど。周りを見る余裕も無かつたんだな、きっと。

「コーヒー飲む、それとも紅茶がいい？ ここってさ、暗室があるから水道も出るんだよ。電気ポットは家から持ってきたんだけどね。それと、僕専用のマグカップ。こっちにはちょっと古いけどCDラジMD。」

すっごい。

「秘密基地みたい。」
「そういう意味では、この本棚の本をどけると。……よっこらしょっと、昔の先輩たちの落書きが一杯書いてある。」

うわー、ほんとだ。“世界を撮りつくせー”、“猫写命”、“造反有理”、なんだか分けわかんないことも書いてある……あ、女子部員もいたんだ。

「長内さん。窓際座って。」

あい。

カシャッ。

「いま、撮った？」

「うん。今日ちょっと来るのが遅れたのって、長内さんにどうしても見せたいものがあって、その準備をしてたからなんだよ。今日、時間あるよね。」

こっくり。

越名君は黒い袋を棚から取り出して、その中に、小さなカメラから取り出したフィルムっぽいのと黒いプラスチックケースを入れて、両方から手を突っ込んでもぞもぞはじめた。

「手品？」

「ふつ。違う違う。ぼくそういう方面のことできない。うさぎも鳩も出て来ないよ。」

笑われたあ。

しばらく無言で手を動かし、最後に何かを確かめるように肩に力を入れると、黒い袋から手を抜き、開いた。ばらばらになったフィルムと、さっきと変わらない、黒いケースが出てきた。

「今この中には。」

といって黒いケースを持ち上げる。

「さっき、学校の中でとってきたばっかりのフィルムが入っている。これを今から現像するんだ。」

そういうと、不透明なボトルから液を注ぎだした。化学の実験みたい。"げんぞう"って何？

「フィルムの中にはヨウ化銀っていうのが入っていて、それが光を受けることによって不安定な状態になるんだ。それをこの液体で反応させるんだよ。」

「くるくる回してるのは？」

「液が満遍なくいきわたるように。」

なるほど。ときどき時計を気にして。時間計ってるのかな。

「長内さんて、あまり喋らないほう？」

こっくり。

「よかった。僕もこういうことしてるとときは、どうしても無口になっちゃうから。喋らない人って、無口に耐えられるでしょ。」

変な理屈だけど、当たってる。私、あまりそういうこと気にしない。

その後、彼は液体を別のポリ容器に捨てて、水道の下で水あらいを始め、黒いケースのふたをはずしてリールを取り出した。リールに黒いリボンのようなものが巻きついている。

「これがネガフィルム。まだびしょびしょだけど、ちょっと見てみて。」

あれ、これなんだろう。

「今現像したのはモノクローム・フィルム。ネガだから世界がすべて反転して写ってるんだ。」

世界が反転？

本とだ、白いはずの学校の壁が黒く写ってる。雲もクロ。空は灰色。でも、木はシロっぽい。そういえば、さっき私を撮ってた。私ってどんな風に写ってるの・・・。

うわっ黒い。髪とか眉毛が白くて、唇真っ白。これって私なの？

「別の世界みたい・・・。」

「ネガティブ。負の世界にようこと。長内さん。」

このとき、私は彼の言葉を軽く聞き流してしまった。彼が、本当は余りやらないんだけど、といいながら、ドライヤーで乾かしているフィルムの方が気になっていたからだ。彼が次にどんな実験を見せてくれるのか、私は子供のようにわくわくしていた。

彼の言葉が、これから私の身の上に降りかかる、大変なことの予告だったのかも知れないっていうのは、後から思った。

でも、このときはそんなこととは夢にも思わなかった。

「よし、じゃ暗室入ろう。」

「暗いんだね。」

ちょっと怖い。そして、ますます匂う。

「暗室だからね。ドア閉めて、蛍光灯消すよ。」

真っ暗！と、思ったら、赤いランプがついてる。みんな赤い。ちょっと目が慣れてきたかな。

「これから印画紙を取り出すんだけど、印画紙って特定の波長の光には感光しないんだよ。それがこの赤色ってわけ。人の目には見えるんだけどね。逆に人の目には見えない紫外線を、フィルムは余計に吸収しちゃう。」

へえー、よくわからないけど不思議。

「フィルムをキャリアにはさんで。印画紙を下に置く。多分十二秒でオーケーのはず。」

カチッ！

わっ、写った。

彼の唇がわずかに動いている。カウントしてるのかな。

カチッ！消えた。

さっきまで写ってたのに、消えちゃった。どうして。

「これはまだ、印画紙の中に像が潜んでいる状態。これをいまから現像液に入れるよ。よく見ててね。」

象が潜む？ の象とは違うんだろうなあ、、、さっきから彼の話している事に、漢字変換が追いつかない。

赤いランプの光の下で、すこし赤みをおびた白い紙が、透明な液体を満たしたおおきなバットに浸される。何が起こるんだろう・・・・。

うわ、うわっ、うわ——————！

写真が、学校が、生徒が、浮かび上がってくる。何にもない白い紙に、世界が浮かび上がって

くる。

「これを見て欲しかったんだ。デジカメとか、カラーとか、写真の表現の仕方っていろいろあるし、それを否定はしない。僕も使ってるしね。でも、他の何かを見る前に、このモノクロームの世界が浮かび上がってくる様子をキミに見て欲しかったんだよ。」

「鳥肌たっちゃった。」

うん。鳥肌が立つってこう言う事なんだってこと、初めて経験した。

竹ピンで印画紙を取り出すと、これで反応を止めるんだといって隣のバットに移した。

「これって酢酸。つまりお酢。この部屋の臭さの元凶。最後に水洗いをして、夏だったら自然乾燥。冬ならそこの乾燥ボックスで乾かすこともある。」

「どうしてトースターなんか置いてあるのか思った。」

「さすがにピザは焼かない。」

また、笑われた。

彼はそのあと、二、三枚の写真を続けて焼き、ベタ？を作って、作業を終わった。

「どう、これ。」

女の子は撮らないんだって言ってたのに。

「私じゃないみたい。・・・ううん、私だとは思えない。」

メガネでひつめ髪。それは確かに私。性格暗くて、自信が無くて。引っ込み思案で、会話に入って行けない。

写真に撮られるとき、いつも少しうつむいて、ぶすっとしている。みんなのようには笑えない。そういう私が、小首をかしげてちょっと笑ってるように見える。そんなこと意識してなかったのに。

っていうか、何かを意識する前に、彼のシャッターの音がしていた。何させられるんだろうって、ちょっとワクワクしてたその瞬間。多分、この前カフェで撮られた写真の私が、自分でちょっといいなって思ったから、今度は、って期待したのかもしれない。

「モデルって、写真に撮られるだけでお金もらえていいなって普通思うでしょ。でもね、彼女たちも自分をどう表現するかで勝負してるんだよ。きれいな人なんていくらでもいるからね。あの一瞬にかけてるんだ。

長内さんのそれって天然なのかな。見るたびに変わるから、撮ってて面白いよ。」

いまいち、褒められてる気がしないんだけど。でも、ちょっと嬉しかった。

「そのベタってなに？」

「ネガはね、反転してるから見にくいんだよ。ベタってフィルムを密着させて印画紙に焼き付けたやつなんだけど。小さいけどちゃんと写真になってるでしょ。」

なるほど・・・他にもこんなの撮ったんだ。やっぱり、私が普段見てる学校と違う。

光る蛇口、フェンス越しに見る運動場、4階から見た1階の通路。すごい、天才だよ、彼って。

「・・・っていうことは、これとフィルムを重ねると。」

「無だよ。真っ黒になるんだ。」

えっ。無？

もう少し写真を焼いてから帰るって言う彼を残して、私は教室に戻った。鞄を持っていけばよかったのに、忘れるなんていけてない。これまで、部活なんてしてこなかった報いだね。また3階まで上がらないといけない。

こんな時間でも、教室に残ってる人っているもんだな。高校に入って3ヶ月。長いようで短い期間だけど、まあ、目立たない私のことなんて、みんな覚えてないだろう。

よそのグループの人とは、基本的に話さないし。

英和中辞典重いな。学校って、どうしてこんなの買わせるの。今日は置いて帰ろうかな。

「長内さん。」

「はい。」

川崎さんが、なんだろう。普段余り喋らない人なんだけど。

「写真部入るんだって？」

「うん。」

もう入っちゃったことになってるんだよね、きっと。

「越名君ているでしょう。わたし、越名君と同じ中学だったんだけど、気をつけた方がいいと思うよ。」

「・・・別に、彼って変な人には見えないけど。」

ドキドキ。もし一生の間に、心臓が収縮する回数に上限があるんだったら、この1週間ぐらいで半分ぐらいは使ってしまって。きっと。

「彼はね。でも、彼の家に問題があるの。彼のおじいさんもお父さんも、突然失踪してるので。彼の家って古くからある写真館だったんだけど、今は閉めてるの。彼のお父さんが失踪してから。近所の人は、かなり気味悪がってるわよ。」

ちょっと、むかっときた。

「あ、なんだ。・・・でも、実はもう入部しちゃったし。」

そんなにあきれた顔しなくとも、いいじゃない。

「知らないわよ。わたしちゃんと言ったからね。」

なんか、知らないところで変な噂立てられそうだな。・・・でも、美少女とかだと困るかもしれないけど、私じゃねー。かえろーっと。

本当のこと言おうかな。

・・・彼の写真を見る前だったら、私、川崎さんの一言で引いてたと思うんだ。でもね、アミちゃんも言ってたけど、彼の写真もっと見てみたい。

もちろん、それだけだったら彼に見せろっていえば（うっわー、私、案外強気。）見せてくれるだろうけど、ちょこっとだけ、自分も何か撮れるかもって思ってるんだ。今まで、何のとりえも特徴もなかった私が、アミちゃんをうならせるような写真撮れるかもって。

絵を描く才能がないのは、中学の美術の時間に嫌というほど思い知らされたし、文章もそれほど好きじゃない。

でも、何かしら、自分を表現してみたいとは思うんだよ。口下手でも、それ以外にも自分を表現する方法ってあるんだって、彼の写真がいってるような気がしたんだ。

あとは、部活があったら家に帰らないでいいって言うのも、・・・ちょっとね。

ウチに、まだカメラなんて有るんだろうか。

私がまだ小さかった頃は、父って人がよく私の写真を撮ってたような気がする。だから、有るんじゃないかなとは思うんだけど。でも、自分で搜しても見つかるわけ無い。頼み事するの鬱陶しいけど、聞いてみるしかないな。

そのころの写真で、どうしたんだろう。見た覚え、無いな。興味もなかったし、昔の自分なんて疎ましいだけだ。小学校の時の私なんて、思い出したくもない。

またテレビか。

「母さん。ウチ、カメラって有る。」

「どうしたの、珍しいこと聞くのね。」

ちょっとはこっち向いてよ、、、向かなくていいか。

「わたし部活始めたの。写真部。だから、カメラ要るんだけど。」

「ふーん。また変なクラブに入ったものね。まあ、あの子達と、ふらふら遊び回るのよりはましかな。確かあったと思うけど、捜して出しといてあげるわ。最近、全然使わないものねえ。」
あの子達って、だれよ。

「ありがとう、ごちそうさま。」

何言われても、我慢、我慢。カメラを手にいれるのが最優先。冷え切った家庭には、カメラなんていらないよ。ついでに言うとビデオもね。

いくら思い出そうとしても、三人で食卓を囲んだ時って、思い出せない。ずっと母さんと二人だ。かあさんはずっと二人分の夕食を作って、テーブルに置いて、それを二人で食べて。その繰り返し。

家族ってこんなものなんだろうか。ウチ以外のことなんて知らないから、わからないけど。

本当にあの人って、この家にいるんだろうか。顔も思い出せなくなってきた。

彼、言ってたな。人の目なんていい加減なもんだ。繰り返し見ないとすぐ忘れてしまうし、現実のありさまより、自分の思いこみを優先して見ている。だから、同じ物を見ても、それぞれ違うことを覚えてるって。

でも、写真は嘘をつかない、なんてちょっとかっこつけすぎ。

きっと、部長も、何かで嘘つくんだろうな。

次の朝、テーブルに箱が置いてあった。

「昨日父さんが出しておいてくれたのよ。全然使わないまま、押し入れに置いてあったとか言って。いつのまに買ったのかしらね、こんなもの。・・・椿も、、、たまには話ぐらいしてあげればいいのに。」

自分だって、喧嘩ばっかりしてるくせに。

「じゃ、これ使って良いんだよね。」

あれ、ひょっとして、これデジカメじゃない。フィルムのが良かったんだけどなあ。でも彼、デジカメも否定はしないし使うこともあるとか言ってたっけ。ま、いっか。新しそうだし。

「写真部とか、・・・変わってるわね。」

あんまりお気に召さないようで。

「最近は、女性のカメラマンて人気有るんだよ。それ向けのおしゃれな雑誌とかも売ってるんだって。」

なんて、ぜーんぜん彼の受け売り。買って、これ見よがしにベッドの上にでも置いとこうかな。

あんまりぐだぐだ言われるの、気にいらない。

「ふーん、カメラマンねえ。まあいいけどほどほどにね。」

いちいち、うるさい。

毎朝、高校まで電車、って言ってもたったの三駅しか離れてないんだけど、それに乗って通うのも最初のうちは新鮮だった。中学の時は”歩き”だったから。通学定期とか、”学割”ってなんだか得したような気がした。けど、もうどうでもよくなつた。

アミ、まだ来てなーい。遅れるぞ、学校。

いくら小学校からの腐れ縁だって言っても、遅刻までは付き合わないからね。だって、彼女は明るくて積極的なのに、私は暗くて引っ越し思案。彼女だったら遅刻も許されるような気がするけど私は絶対無理。誰にも気づかれないまま欠席にされる。

高校に入つたら、その性格を直したいと思ってたんだけどなあ。中学の私を知つてゐる人がいないところで。

アミちゃんの社交的な交遊に引っ張りまわされて、私はいろんなところに連れて行かれる。そういうのを、ウチの母親は気に入らないようなんだ。

グリとミノリって私のことどう思つてるんだろう。四人組つて言つたって、実質は3+1なんだよ。

わたしはアミちゃんのおまけ。

「ツバキおはよー・・・。」

「どうしたの、朝からどんよりしちゃって。なんでもいいけど次のに乗らないとやばいよ。遅れるよ。」

「分つてるー。」

急行と違つて普通電車は余り混まない。ウチの学校の生徒が多い。もちろん他校の制服も。そして、アミはあんなにどろどろだったのに、電車に乗るとシャキついてくる。

「栄養ドリンクより、視線にさらされる方がよっぽど効くわ。」

アミの名言。見られることを放棄している私には、全然足りてないもの。

では、アミちゃんの、誰にも見られていない、自宅での生態はというと、パジャマ兼用のジャージとすっぴんメガネなのだー。しかもコンタクトにしてから買い換えてないっていうメガネは、かなり笑える。

アミの女王様デートがない休日には、私はよくアミの家に転がり込んだものだよ。だから、アミは私の保護者なんていったりするんだ。

「アミちゃん、今日はわたし部活だから。先に帰っててね。」

「うっ・・・。寂しいわ。・・・でも、今日は水曜か。キョウヘイ、バイト休みの日だな。本じやデートでもするかな。」

「その程度なの！」

「ツバキ、カレシに幻想いだいちゃ駄目よ。あんなのバッグとかアクセと同じ。カレシは愛人じゃないの。ドラマとか映画であなたが死んだら私も死ぬとかやってるけど、うそうそ。そんな簡単に人は死んだりしないって。」

夢を抱く以前に、夢を幻想だと打ち碎かれる私って、いったい。

「そんなに部活楽しいの？私よりも部活がいいのね。しくしく。」

もう、放っとこーっと。

そんなに部活が楽しいのか？

そうではないような気がする。でも、高校に入って自分を変えたいって言う気持ちにかわりなく、それへの一歩のよう感じている。そういう意味では、写真部である必要はなかった。

決して部室に“白馬にまたがった王子様”が待っていてくれるわけではなく、いるのはあだ名が口バの写真オタク。彼はあれを手品ではないといったけど、彼の見せてくれるものすべて、不思議でびっくりでしょうね。

だから、授業中も早く放課後が来ないかと、わくわくしてる。それになんといっても、今日の私の手にはマイカメラが。

昼休みに箱開けて、あちこちいじくりまわしてみたけど、全然使い方分からない。スイッチオンにすらならない。おまけに、グリには「拳動不審者。」って言われるし。でもミノリは「例え何にせよ、ツバキがやる気出したのはいいことだよ、うんうん。」って言ってくれた。

・・・物理って退屈。

特に昼イチの物理なんて、睡魔が椅子半分に座っている。

せんせい、なにか手品やってください。黒板からウサギ出してください。

“さて、宇宙が始まるまえには、何もなかった。何もないところでビッグバンが発生した。その瞬間宇宙は物質で満ち溢れ、それはやがてガスになり、チリになり、光になり、星になって、宇宙はいまだに膨張を続けている。

これはおかしな話だ、何もないところで爆発が起こって、物質があふれだした。無から有が生まれ出されたってわけだ。”

いってる意味わかんない。

“質量普遍の法則って聞いたことあるな。入試にも出てたかもしれないな。

物を燃やそうが溶かそうが、何かと結合して物質の性質は変わるかもしれないが、質量は変わらないって言う法則だ。”

あ、じゃあおかしいじゃん。つまり0が100に成ったってことね。

“そこで、科学者はある上手い説明を考え出した。物質が生み出されたときに、同時に反物質が生み出された。物質が正とすれば反物質は負の存在で、それが出会えば物質も反物質も消滅して、元の何もなかった状態となる。

じゃあ、なぜ物質だけが残っているのかというと、物質の方が消滅するまでの寿命が長いからというのがその理由らしい。あるいは重なり合う宇宙の別の次元に存在していて、いまのところ出会うことがないからかもしれないな。”

正と負か。 $1 + -1 = 0$ ね。確かに上手いけど、それって本当なの。

“そういうことを直観した人がいて、いま徐々にその説が正しかったことが証明されつつある。反物質は自然界には存在しないんだけど、本当はこの広大な宇宙のどこかには、大量に存在しているのかもしれない。

なんせ見つける方法がないから、本当のところはよく分からんのだ。”

へえーそうなんだ。

ちょっと、写真に似てるかも。ネガフィルムだけ。それを焼いた写真とあわせると真っ黒に。無になるんだって言ってたな。そうか“無”ってそういう意味かあ。

彼ってこの話知ってるのかな。一年だからまだ習ってないかも。

今日言ってやろうっと♪

「加速器とか使って人工的に作る実験で、成功してるらしいな。ま、存在の可能性は証明されたってことじゃないの。」

・・・つまんないの。男の子って本とつまんない。そこは付き合いでもいいから、へえーって驚こうよ。

「うちの祖父さんてさ、家業の写真屋継ぐまでは、帝大で物理学の研究をしてたらしいんだ。仕事継いでからも、仕事そっちのけで独学でいろいろ研究してたみたいで、オレも分からないうりに遺品のノートとか読んでた。いろいろ図とか描いてあって、ちょっとかっこよかったんだよな。」

・・・いつの間にか“オレ”になってるし。

「反物質とか、わけわからないこともその中に書いてたけど・・・。自分の目で見てみないことには、なかなか理解できないし、信じることも出来ないよな。」

「おじいさん、突然いなくなつたって聞いたけど。」

「ああ・・・。」

わたしって、ほんと、根性曲がってるわ。ちょっと期待はずれたからって、そんなこと、いま口に出さなくていいじゃない。失敗したー。普段、会話に参加してないから、こういうところで失敗するのよ。

「突然てわけでもないらしいんだけどな。祖父さんのこと知ってるってことは、親父のことも知ってるんだ？」

こっくり。

「気持ち悪い？ 部活、やめとく？」

ふるふるふる。

「オレはもう慣れてるから大丈夫だけど、長内さん巻き込むのは本意じゃないし。」

ふるふる。

「長内、面白いな。てんばると、言葉でなくなるんだ。」

こっくん。

「それ、持ってきたんだ。使い方分からんんだろう。貸してみ。」

彼はその後、箱の中身を全部机に出して、私がわかりにくいので放棄した説明書を一読もせずに、あちこちのふたを開けたり、カードを挿入したり、電源をつないだりしてた。

なんか、にこにこして楽しそう。機嫌直ったかな。

「オンにしたのに、何にも動かないの。」

「バッテリーが空だったからね。長い間放ったらかしにしてたんだろう。」

そっか。充電してなかったから動かなかったんだ。すっごい簡単な理由。

「殆ど使ってないねこれ。」

「フィルムにしたかったんだけど。」

「いや、初心者はデジカメでいいと思うよ。フィルムカメラって、フィルムとか印画紙にやたらお金かかるからね。デジカメだったらバシャバシャとて、いらないの消してけばいいじゃない。パソコンでも見れるし、保管できるし。」

それに、その眼鏡だと、ちょっとファインダー覗くのきつそうだな。ま、フィルムはさ、写真展目指して徐々に始めていけばいいよ。まずは、数をとること。そして自分の写真を見つけること。」

「写真展！　自分の写真？」

そんなの聞いてない。私が写真展。"引っ越し"で、"才能"と"芸術"っていう言葉に15年間全く縁がなかった私が、写真展！

「口ではいえない。でも撮ってるうちに分かると思うよ。おっと、お湯沸いた。コーヒー、紅茶？」

「わたしやる。お世話になってるんで。」

って、すっと言えた。彼の前だとあまり緊張しないな。どうしてだろ。

さてと。デジカメ以外にも、今日私が持ってきたもの。マイカップ。なんかの粗品だったから、デザインはまあなんとか我慢できる範囲のものだけど、ここが私にとっても秘密基地になるようだ。

でも、写真展は無理だと思うなあ。きっとそんな根性無いよ。

「明日からは、職員室に鍵もどしとくよ。オレがいないと入れないんじゃ困るだろ。」

「いいの？ ワタシが開けて。」

「部員だから。公平あつかいで良いんじゃない。 さてと、満タンじゃないけど、充電できたみたいだよ。この状態でも 3、40 分は使えると思う。バッテリーを入れて、オンにしてみて。」

その後彼は、モードダイアルがどうとか手ぶれ補正がどうとか、いろいろ説明してくれて、最後にこれとこれの位置は当面動かすな、あとはメニューで設定しておいたからって言って、私の手にカメラが戻ってきた。

「撮りたいなー。」

「撮れば。」

「じゃ。」

パシャッ。

「オレかよ！」

「だって、越名くんもわたしのこと撮ったじゃない。」

実は、この瞬間を待っていたのだ。

「あー、消えちゃった。消えちゃったよー、どうしよう、せっかく撮ったのに。」

「このボタン押す。」

よかったです、出てきた。多分もう一度押すと元に戻るんだよね。ほらー出来たじゃない。

「何か、すごい得意げだな。でも、よりによってオレの写真なんか、、、人に見られないようにしろよ。やな噂立てられても知らないぞ。」

噂？ 噂なんて立たないよ。わたし、クラスでも注目度ゼロなんだから。彼、そういうの気にするようにも見えないけどな。

メモリー4ギガだから、八百枚ぐらいとれるだろ。しばらくはパソコンに繋がなくても大丈夫。このケーブル使えばテレビでも見れる。バッテリーの残量には気をつけろ。もし部に昇格できたら、予算でプリンター買っても良いな、直接プリントできるやつ。ぶつぶつ・・・。

「部長、ついて行けません。」

「部長？ オレが？」

「だって二人だし。ワタシとても無理だし。」

「じゃあ、長内さん、副部長な。」

ふるふるふる。無理、理解不可能。

「てんばると、やっぱ無口になるんだな。ははっ。二人だからしょうがないだろう。」

紅茶飲んで、心落ち着けよう。日曜日からこっち、話の展開が急で私自身ついて行けないときがある。今、こうして男子と話してる私って、ホントに引っ込み思案で眼鏡でひつめ髪の”長内椿”なんだろうか。信じらんない。こうやって、紅茶飲んで話してる私と、違うワタシがどこかで見てるような気がする。

「越名くんのカメラ見せて。」

椅子に座ったまま、机の上のカバンに手を伸ばして。中をごそごそ。無精者だなきみは。

「はいよ。」

「古そうだねこれ。しかも・・・すっごく重い。」

F3、、、えふ、さん？ これが名前？

「おかげで右手の握力は強いぞ。そうだな、もう二三枚しか残ってないから・・・、長内さん動かないでね。」

何か、ワタシ、緊張するんですけど、コップ持ったままで。・・・でも、カシャンてすごくいい音。それで・・・。

「何してるのそれ。」

「巻き上げ。手動巻き上げなんだよ。」

また意味の分からないことを・・・。その後、もう二つ撮られて、彼が右手をくるくる回して、裏蓋を開ける。フィルムを巻き取ってたのか。へー、中ってこんな風になってるんだ。面白い。って言う間、越名くんはカメラの話をよどみなく。でも、全然聞いちゃいませんぜ。

物理の授業以上に、何も頭に入らなかった。キミ、それじゃ女の子にモテナイよ。それとも、そういうこと、どうでもいいのかなキミって。

ふふーん。

その方が私は安心だけど。

恋愛とかに、いまはまだ巻き込まれたくない。

誰かに好きになってもらえるほどの、容姿だとは思っていない。誰かを好きになっても、自分のどこかを好きになってもらう自信が無い。

だから、恋愛なんてしてもつらいだけだろうと思う。

だから今はそういうことに巻き込まれたくない。

越名くんは、カメラに触れている時が一番楽しそう。だから、私なんかに興味をもったりは、しないだろうと思う。

だから安心して、ここにいられる。

そんなふうにして、私は放課後の時間を写真部ですごすようになった。

だからといって、毎日越名くんと一緒にいるということではなくて、時にはずっと一人のこともある。

お湯を沸かして、紅茶を入れて、たぶん卒業していった先輩が残していった写真集とかノートをずっと見ている。

ユージン・スミス。ウェストン。無名の写真家による古い写真のポートレート集。そして、彼が尊敬してるっていってた、ロバート・キャパ。この兵士が撃たれて倒れる直前の写真。私でも知ってる。

彼の、ロバってあだ名。きっとロバートから來てるんだ。だからロバって言われると、嬉しそうにしてるんだ。それは、そうだよね。四つ足で歩くロバくんだったら、彼も嫌がるよきっと。

写真には、よろこび、かなしみ、やさしさ、つらさ、いかり、いつくしみ、人のすべての感情が写されている。貧困や贅沢や、ショービジネスから地味な手仕事まで、人の営みの全てが焼き付いている。

古い街角の写真には、時が止まっている。

私にも、こんな写真が撮れるんだろうか。

お酢の匂い、酢酸って言ってたけど、それにも慣れてきた。

今日は来ないのかな・・・。

あ、雨だ。みんなあわてて走ってる。もう本当に梅雨だよね。

カメラでパチリ。

結構溜まってきたんだけどな。カメラについてるのじゃなくて、大きな画面で見たいな。

家のパソコンはお母さんが通販とかに使ってる。でも、そこで私の写真をみるのは嫌だ。ウチの家族には見られたくない。今度、彼に相談してみよう。今日はもう、帰るかあ。

はあ、家についちゃった。

傘たたんで、ドアの鍵開けて、靴脱いで、そのまま二階の自分の部屋に上がっちゃう。制服脱いで、Tシャツに着替えて、私の青春って、なんていじけてるんだろう。

雨が降ると、どうして街が灰色に見えるのかな。どこか遠くのほうで、雷の音がした。彼、モノクロームって言ってたっけ。辞書によりますと・・・へー、白黒っていう意味だったんだ。わたしの、この彩のない青春も、モノクロームだな。

「椿一、ごはんよー。」

いじけた青春でも、お腹はすぐ。アミちゃんだったら、家でうだうだしてないで、どっかに遊びに出かけちゃうんだろうな。夜でも。でも、私には、そんな器量も度胸もない。

「最近、帰り遅いわね。」

「部活あるから。」

食べるか喋るか、どっちかにすれば。

「写真部の部活なんて、なにするの。」

「写真撮ったり、写真集見て勉強したり、現像の方法教えてもらったり、まあ、いろいろ・・・」

」

「椿はどんな写真撮るの？」

質問多いな。小学生じゃあるまいし。今日何勉強したの、とか、今日誰と遊んだのとか、高校生なんだからどうでも良いじゃ無い。

「いろいろ。特に決まってない。まだ、試行錯誤中。」

「いつか見せてね。」

「。。。。」

もう何年も、二人だけで食事している。チチとは殆ど顔も合わさない。夜遅く帰って、朝早く出かけて。私が高校生になったこと、知ってるんだろうか。

休みの日は、極力一階には降りないようにしている。あの人が起きだす前に朝食済まして、出

かけてしまう。図書館とか、アミちゃんの家に行ったり、グループでお茶しにいったり。あと何年こういう生活を続けるんだろう。

「ごちそうさま。」

休みの日、部室開けたら学校から怒られるかな。避難所代わりにするなって。

、、、そんなこと、誰にも分からないだろうけどね。

今日は朝から雨。昨日の午後から降り出した雨がまだ続いている。

「ねえねえ、昨日のアレ見た？」

ミノリ、アレじゃわかんないよ。

「金曜特番“闇に響く叫び声。青木が原樹海に心霊の呼び声を聞いた。”ってやつ。」

「夏だねー。」

いくら夏でも、そのタンクトップ。

「毎週どっかのテレビ局でやるよね。」

「ツバキはだめそうだな、ああいうの。」

ふるふるふる。グリ、駄目押さなくっていいって。想像しただけでコワイよ。

「そうだよね。で、どうだったん。」

ええー、この話し続けるの・・・。

「ワンパターン。レポーターがビビリながら、ここ何か寒気がしますねとかいって歩いてくんだけ、冷静になつたら、ただ歩いてるの見てるだけなんだよ。普通さ、街灯のないところあるくだけでも、十分怖いよね。樹海とかじゃなくても。」

そうそう、その通り。だから怖くないぞ。違うか？

「でも見ちゃうよねー。霊能力者とかが、もっともらしくお祈りするのとか、雰囲気盛り上げるために出てくるよね。」

やっぱりもう止めようよ、この話。

「ねえ、ツバキ。心霊写真とかってさ、アレって本物なの？」

嫌な方向に話しが進んでる。土曜日の昼下がりのファミレスでー、どうして霊の話をしないといけないの。

「わっ、私わかんない。」

「しっかりしろー、写真部。」

「私まだ駆け出しだし、そんなのわかんないよ。」

我ながら、理屈になってなーい。

「よーし、じゃあ、口バに聞いといて。」

そんなあ、ロバート・キャパを目指してるような人に、心靈写真てホンモノ？なんて聞けないよ。バカにされるに決まってる。ただでさえ無知っぷりさらけ出してるのに、これ以上いやだよー。

グリの意地悪。

「私が聞いた情報によるとですなあ。ツバキと口バって、なかなか親密らしいねー。放課後の部室で、二人でお茶してるらしいじゃーん。」

「ええー、私のツバキちゃんがー。お母さんはそんな子に育てた覚え、ありません。」
え、マジっ、情報とか！誰がそんなこと。

「うわー、顔真っ赤だ。しかも無言。」

「で、どうなの、ツバキ。恋？L o v e ? ハート？」

勝手に、人の背景に花びら散らさないで！

「た、ただの部長と部員だもん。アミちゃんならともかく、私にそんなのありえないよ。」

「あれー。それを言っちゃー、おしまいだろう。」

どうしてよお。

「そうそう。ツバキも地はいいんだから、もうちょっとおしゃれすれば光ると思うよー。」

ただの石でも、磨けばそれなりに光るとは思いますけど。わたしは、ただの路傍の石で結構です。

「相手にもよるけどね。なんせ口バだし。しかも写真オタだし。」

うーん、て、そこでみんな考え込むなー。越名くんに失礼だろう！

彼はオタだけど、彼のオタはゲイジュツなんだからね。アニメキャラの、添い寝枕抱いて眠るのとは分けが違うんだから！

「なーんてね。怒ってる怒ってる。」

くっ！

「毎日だもんねー。よく続くよ。絶対三日持たないと思ったのに。次は三ヶ月続くかなー？」
はめられたー。

「三ヶ月って言えば、アミもそれぐらいじゃないの。」

「うーん、まだそこまでは行ってないなー。でも、もう別れよっかなー、次のが見つかったら。」

「はやっ！」

「速攻だねえ。」

よかっただー、話がそれた。もうちょっとでトイレに逃げるところだった。

「うーん、あいつ性格悪くなってきてさ。いらっしゃるし、すぐ怒り出し、なんだか金、金ばっかり言うし、つまんないんだよね。」

なんか勘違いしてる。私が付き合ってあげてるのに、俺の女だみたいな扱いだし。ギターも口ほど上手くないし。・・・そうだな、もう一週間持たないかも。」
え——、もう飽きたの。相変わらず早いなあ。

「じゃあ、アタシ紹介して。」
「うーん、他の男ならいいけど、あいつはやめときな。クスリに手ぇ出してるなんて噂も聞くし。・・・最初は信じてなかったんだけどね。」

「うわあ、終わってるね。ヤツ。」
「人間やめちゃったのか・・・。」

「そこまで面倒見る義理はないわ。」
カレシを持つって言うのも、いろいろあるんだね。部外者の私には分からないけど。

そして放課後。普通だったら、今日は止めとこう、なんてなるんだろうね。

私が聞いた情報、ですか。私なんかでもそんな噂たったりするんだ。物好きって言うのか、みんな暇って言うのか。

でも、C組の長内とE組の越名が・・・とか噂しても、普通、だれそれ？で終わるんじゃないかなあ。

いまいち、ぴーんと来ない。

「ちわーっす。」

来た。ちょっと緊張。でも、えと？

「何その荷物？」

「家から古いノートパソコン持ってきた。見たいだろ自分の写真。結構溜まってるんじゃないの。」

こくこく。

「ん？ 何てんばってるの。」

「み、見たいけど、越名くんに見られるのがちょっと、・・・はずかしいです。」

「ふうん。じゃあ、やり方教えてあげるから、その通りやってみて。オレ見ないようにするから。」

この線をここここに差し込んで、暫らく待つと、ソフトが起動して画面が出てくる。

コピーしますか？ OKを押す、の通りやりなさいと。

パソコンは授業でも使うから、それぐらいのことは出来ます。

・・・なんか動いてる。あ、出てきた。すごっ。

「これ、どうしたら大きくして見れる？」

「カチカチッとして。」

ダブルクリックって言えー。それぐらい知ってるぞー。バカにす、、、わあー、全然おっきー。やったー、私の写真だー。

「矢印押すと、次のが出るよ。」

こんにちは、私の写真たち一。お母さんだよー。あ、これ、あのとき家のそばで撮ったのだ。
蔓がうにようによして面白かったんだよね。

「なかなか、いいんじゃない。」

「そうでしょ！」

って、どうして後ろにいるの、見ないって言ったじゃない。もう！見ないでー。ばかー。

「さっきOKって押したってことは、もうパソコンにコピーされてるってこと。だから見ようと思えばいつでも見れるんだよ。」

聞いてないよー。

「長内、もっと自信持てよ。この写真いいよ。テクニックとかさ、構図がいまいちなところはあるけど、長内がいま興味を持つてるところに、ちゃんとフォーカスがあってる。

何か感じて写したんだなー、って言うのがちゃんと伝わってくるって。そんな困るって顔しないで、自信もっていいぞ。」

褒められた。今まで、人から褒められたこと無かったのに。嬉しい。でもやっぱり見られるのはちょっと恥ずかしいな。

「ま、あんまり口は出さない方がいいんだけど、例えばここの、この端っこの部分で要るかな。」

あうー。

「もう一步踏み出して、対象をアップにして、ここをカットしても良かったんじゃない？ちょっとここ縮めて見ようか。」

なるほどー。そうか。じゃ、これは。

「うーん飛行機雲ね。誰もが一度は撮りたくなるよね。これどうして横位置でとったの。」

あうー。

「縦とか斜めにしても良かったんじゃない。飛行機雲って長いでしょ。ま、そんなふうに写す物をどう切り取るかって事も、結構大事だって事だよ。でも、えらいよ。こんなにたくさん撮って。」

じゃあ、これはこれは。カチッ。

「長内、カチッ、にこっ、じゃなくて、ちょっと喋れば？」

あうー。

「こーんにちわー、って、おじやまだったかしらー。」

その声はアミちゃん！どうしてここに。

「どなた？」

「覚えてないの？あのときツバキと一緒にいたじゃない。」

「んー、記憶にないな。とにかく長内の知り合いでことか。」

「ショックだわ、こんな屈辱初めて。ツバキちゃんよりワタシの方が印象薄いだなんて。」

そのくらくらって振り、大げさ。

「ま、長内の知り合いなんだ。」

「貴嶋 亜美。ツバキちゃんの保護者なの。ちゃんと覚えといてね。」

「で、なに用で？」

「ツバキちゃんの保護者として、どういう環境で部活をしてるのか、参観に来たってわけ。だって、今までずっと一緒に帰ってたのに、ツバキちゃんなら部活だ部活だって、部活だから先に帰ってって、つれないんですもの。悪い宗教にでもはまってないかと、もう心配で心配で。」

嘘ばっかり。デートだから先に帰れって、ショッちゅう言ってたくせに。

「長内、この人ホントにキミの保護者なの。」

まあ、自称そうだわな。こっくり。

「へえ、保護者って言うより、密猟のハンターみたいだけどな。えと、急がないんだったら中に入る？戸口塞いでないで。それとも、こういうオタッぽい部室は苦手かな。」

えー、わたしもオタクの仲間入りなの。

「それより、ここってどうして、お酢の匂いがするの。なんか臭い。」

「雄の匂い？男はオレだけだけど。」

「ねえ喧嘩売ってる？売ってるんなら買ってやるわよ。わたしこう見えて、わたしの代わりになら、喜んで喧嘩してやるって男いっぱいいるのよ。」

「そうだろうな。参りました。」

はっはっはっ・・・て、アミちゃん、入ってきていきなり越名くんと仲良くなっちゃった。
そんなのズるいよー。

「見たよ、ポジ。ちょっと良かった。」

「あ？ああ、長内にふんだくられたやつ？って言うか、ポジなんて一般人のわりに、よく知ってるな。」

「子供の頃、モデルやってたし。それで、そういう言葉、ちょっと聞きかじったりとかね。もっと見せてよ。」

「写真部、部員募集中。熱烈大歓迎！」

「やなこったい。」

「だろうな。」

はっはっはっ・・・て、アミー。

「おう、こんなところにこんな部屋あったなんて知らなかつたぜ。」

誰？今日はお客様多いな。

「ちっ！」

でた、アミちゃんの舌打ち。

「アミー、なんでこんなところにいんだよー、最近会わねーからさー、見かけたんで来てやつたんだぜー。」

うわ、勝手に入ってきた。

「この部屋いいなー。何あの機械みたいなの、へー、パソコンとかも置いてるのか。俺も仲間に入れてよー。」

なんか嫌なやつ。髪染めて、パーマかけてるし。たぶん二年のキョウヘイとか言うひとだ。越名くん、どうしよう。

「ここでタバコすったら爆発するぜ。薬品とか可燃物、一杯置いてあるからな。」

「そういえば、なんかくせーと思ったんだよ。お前が腐って匂ってるのかと思ったぜ。・・・

おい、アミ。こんなところにいないで、バンドの練習見にこいよ。みんなアミがいないと張り合いないってよ。」

アミちゃん。こんな人と付き合うのやめたほうがいいよ。

「悪いけど、帰ってくれる。それと、もうあんたとは二度と会わないから。学校でも外でも、見

かけても声かけないでね。」

うわー、すごー。

「あんだと、この野郎。ふざけやがって、何様だと思ってるんだあ！」

「アミ様に決まってるだろ。」

「てめ！」

アミちゃん危ない！

「待った。」

「うっせー、口出すな！ オメーに言ってんじゃねー！」

「このボトル、中に入ってるの塩酸。希釀液だけどね。それからこのカメラ。古いから金属のダイキャストで2キロある。頭ぶつけると頭蓋骨が陥没する。今はアルミ製が主流だけど、この三脚も古くて鉄製なんだよ。こういう狭いところで暴れると、事故って起こりやすいんだよねー。ね、長内さん。」

「そうそう。私もこの間、躓いちゃって危なかった。」

って、なに調子合わせてるの私！背中に気持ち悪い汗が・・・。

「オメーに関係ねーだろ！」

「そう怒鳴るなって。貴嶋さんは今うちに入部希望で来たんだよ。オレは来るものは拒まず主義だから、ま、入部したも同然。となれば、うちの部員は守らなくっちゃ。しかも部室内だし。ね、貴嶋さん。」

「う、うん。部長助けて。」

「へ、やれるもんならやってみろよ。」

「貴嶋さんちょっとどいてくれる。女の子の膚が焼けたら洒落にならないからな。」

どうするの。ほんとにやるの。それって傷害になるんじゃ。

立った。うわ、ほんとに蓋開けて、、、においかいで、、、にこって、マジ！こわい！

この人、逝ってる。

「ま、骨までは溶けないけど、眼はつむつといたほうがいいよ。眼球白濁するから。あと皮膚が焼けるのって余りいい匂いじゃないからね。鼻つまんどいてね。」

「くそっ、こいつ狂ってやがる！お前なんか、この変態野郎が似合いだ！」

で、出て行った！・・・よかったー・・・。なんか、気が抜けた。怖かったよー、アミちゃん。

「情けない・・・。」

どうしたの、ぽつっと・・・うつむいて・・・つらいの？

「あんなバカと付き合ってたなんて、ほんと情け無い・・・。私、十五年間何やってきたんだろう。最初はあんなじゃなかったんだけどな。」

男って付き合い出すと図に乗るけど、そんなのはまだカワイイ方。あいつ、変なんだよ最近。

」

カシャ。

「いま、何撮った。」

「あ、つい。」

「助けてもらって、一応、礼言おうと思ったけど。」

「ごめん。カメラマンて最低の人種だよ。こういうときにこそ、写真撮っちゃうんだから。でも貴嶋さんの今の顔って、本当っぽかった。」

本当ぽい顔？って、なに。アミちゃん分かる？

「やなやつ。」

確かにちょっと、ウチの部長は変わってるし、決して性格がいいとも思わないけど。こんなときに写真とってるし。

「私、子供のときモデルやってたってさっき言ったでしょ。カメラ向けられて、ポーズとるの好きだった。可愛い可愛いって言ってもらえるし、そのあと、好きなおやつとか食べさせてもらえるし。」

へえ、なんだ。そういう世界って縁がないなあ。

「何にも知らなかったんだー。それがどういうことか。

濡れ手に粟のお金が、ちゃんとした道徳観のない親の手に入るってことが、どういうことかってね。ま、それはいいんだけど。もうね。

・・・でも、いまだにその癖抜けないの。っていうか、そうしてないと不安でしょうがないの。あんな親の子供なんだっていうのがね、不安で仕方ないんだ。」

知らなかった。女王様みたいに自信たっぷりのアミちゃんが、そんなこと悩んでたなんて。

「・・・何、その手。・・・もういいよ撮っても。その音、気持ちいいし。・・・私がまだ幸せだったときの音だ。だからかな、・・・。」

カシャ。

「人には話した事無かったんだけど。」

カシャ。

「後でちゃんと見せろよ。」

カシャ。

アミちゃん、今幸せじゃないの？ あんなにもてて、友達も一杯いるのに。

「自分を作るって、そんなに悪いことじゃないとおもうぞ。守りたいものって、誰にだってあるだろ。

貴嶋さんは、自分がそういう人間だってことちゃんと知ってるから、それはそれでいいんだよ。

ただ、周りの人間よりちょっと大人だから、こういう環境にいる人間とのギャップががつらいんじゃないかな？」

ひえー、部長、哲学しますよ。

「あんた、いいこというね。・・・私と付き合う？」

「いや、オレは特定の部員と仲良くするのはよくないと思うぞ。」

「誰が部員だって。」

「さっき、否定しなかったじゃないか。」

部長、その笑み策士っぽいです。

「あの時は・・・もういいや、人の足元見やがって。ほんとどういう人間なんだか。」

アミちゃんが折れた！

「資産家の放蕩息子。」

「それで物怖じしないのか。資産家って？」

「うち、家業は写真館なんだけど、オヤジがいなくなってるから一回もあけてないんだ。それでも母親とオレとが生活していくのって、貸家とかマンションの土地の貸与収入があるからでね。生活には困らない。」

「やっぱ付き合う？」

「うちの家、祖父(じい)さんとオヤジが失踪してから、悪霊がついてるとか祟られるとか変な噂が一杯ついてるんだ。オレはうすうす見当がついているから、別にいいんだけど、母さんはずっとだからな。参ってるよ。だから、やめといた方がいいと思うよ。」

「ふふん。そのうち跪かせてやる。」

「そりゃ、楽しみだ。・・・長内、おとなしいな。知り合いなんだろ。」

だって。二人があんまり仲よさそうにしてるから、割り込む隙がないんだよー。いじいじ。

「ツバキー、今日は付き合って。ひとりで帰るのコワイし。さびしいよ。」

「うん。わかった。」

とかいって、私なんにも出来ないけどね。多分叫ぶとかも無理。

「じゃ、鞄とって来るから、待っててね。」

また静かになった・・・。いつもと同じだ。

「さっき、本気で塩酸かけるつもりだったの？」

「塩酸？ あー、酢酸の間違いだった。停止用のお酢だよお酢。」

「じゃあ、はったりだったの。」

「まあね。」

あきれた。上手く行かなかったらどうするつもりだったんだろう。でも、

「アミちゃん助けてくれてありがとう。・・・アミちゃんのあんな一面、今まで気がつかなかつたなー。私今まで何見てたんだろう。」

「長内はそれでいいんだよ。貴嶋さんが長内に求めてるものって、そういうことじゃないんだよ。友達だったら、そうっとして置いてあげたほうがいいこともあるさ。」

じゃあ、なんで越名くんは気づくわけ？ 不公平だよ。

「カメラマンていうのは、そういう人種なの。レンズを通して、人の本当を引き出すのがカメラマン。」

納得いかない！



次の週末。アミちゃんは、誰かに紹介してもらった人と「お見合い。」とかで、どっかに出かけるっていってた。

朝から雨で、図書館に行くには自転車に乗れない。寝たふりをして、一日中部屋にこもっていようかな・・・・櫻町だっけ。写真館で言ってたな。どんなだろう・・・ちょっと行ってみようかな。

どんなところなのか、見るだけ。

雨の日。空色の傘から水滴が落ちる。その水滴の落ちる寸前を、片手でパチリ。水滴の中に、緑の木が逆さまに写っている。面白い。

長靴かなんかにすればよかった。スニーカーちょっとぬれちゃってる。それも下を向いてパチリ。この傘を叩く雨音ってとれないのかな。T字路を横切る人をぱちり。あー車がかぶっちゃった。削除しとこーっと。もう一回来ないかな。

公園。誰もいない。滑り台ぬれてる。ジャングルジムも。

こっちに来たことなかったから、この公園は初めてだ。草が雨の重みで頭をたれてる。みんながごめんなさいしてるみたい。こういうのどう撮ればいいんだろ。上からだと上手く撮れないな。

もう一回。・・・もう一回。

雨、強くなってきた。

あそこの藤棚の下にでも避難しようっと。

また、だんだん灰色になってくる。ただでさえ周りがよく見えないので、どんどん灰色だ。モノクロームの世界。なんだか私みたい。地味で、引っ込み思案で、目立たない。

どうしてこんなところで一人で立ってるんだろう。

何に期待したんだろう、、、何か期待したんだろうか。

こっちに来れば、何かいいことがあるとか思ったんだろうか。

・・・涙出てきちゃった。

雨は二十分ぐらい強く降り続いて、ようやく小ぶりになってきた。藤棚の下にはいたけれど、膝から下がぐしょぐしょになっている。気持ち悪い。

「あのう。失礼ですけど、長内さん？」

横から声をかけられ、私は声の主を凝視した。メガネにまで水滴がついている。知らない人だけど、全く知らないって言うのでもなさそうな気がするのはどうしてだろう。

「そうです、けど。」

「よかった。違ってたらどうしようかと思ったの。始めまして、睦月の母です。」
むつきの母？ あー、

「越名くんの、お母さんですか？」って、本人がそういうてるじゃないの私のバカ。
くすくすくす・・・。可愛い笑い方。

「こんなところでどうなさったの。足がずぶぬれね。うち、近くだからいらっしゃる？
乾かさないと気持ち悪いでしょ。」

上がりこむつもりはなかったんだけど、でも目的地には違いないし、探す手間が省けたといえば省けた。

というか、何となくこの人に興味がわいた。あきらかに、うちのハハとは違う人種のような気がする。

「さっきの雨すごかったわね。あそこで雨宿りなさってたの？」
「はい。」

足、気持ち悪い。靴下が、濡れ雑巾みたいだ。

「私はスーパーにいたから大丈夫だったけど。」
でもどうして私って、わかったんだろう。部長といい、お母さんといい、不思議な家族。

「つきましたよ。案外近くだったでしょ。」

うわあー、アジサイきれい。いったい何株あるんだろう。それに、この家。どこかの居留地の異人館みたい。といっても、写真でしかみたこと無いんだけど。彼こんなとこに住んでるのか。

あ、 ドアが開いた。

「母さん、 雨大丈夫だった？ あれ、 なんで長内なんか連れてるの。」
なんか道端で拾われた犬みたいじゃない、 それじゃ。

「そこの公園で拾ってきたの。足がずぶぬれみたいだからタオル用意してあげて。それと乾くまで履くスリッパ、 とね。」

玄関のドアを入ったところで、私は少し待たされた。すると、大き目のタオルを持った彼が奥のほうからやってきた。

「このスリッパに履き替えてもらうけど、・・・そうだな、右足から靴脱いで。」

よっこらしょっと。

「靴下も。オレの肩掴んでいいから。」

いわれるがまま・・・。だけど、濡れた靴下って脱ぎにくいし、わたし、めちゃくちゃ格好わるいなあ。

え、

「そんなことしてくれなくていいよ。」

「じゃあ、他にどうやって足拭くんだ。じっとしてろ。」

恥ずかしい、けど、ちょっとうれしいかも。こんなふうに拭いてもらったのって、すっごい昔に有ったような気がする。気持ちいい。

「スリッパ履いて。次は左。」

ついさっき、私は何で泣いてたんだろうな。

六月にヒーターなんて、って苦笑いしながら、彼は靴下とスニーカーをタオルハンガーに載せ、その下のオイルヒータのスイッチを入れた。靴下まで持ってもらおうなんて思ってなかったんだよ。ついこの間知り合ったばかりの男の子に。

でも、この家の中では余計なものに手を出すなって、命令するんだもん。確かに、なんだか高そうなアンティークの照明とか絵皿が飾ってあるし、いかにもわたしって失敗しそうだもんね。ふんだ。

・・・と最初はそう思ったんだけど。次第に、彼がこの家ではそうやって暮らしてきたんだってことが分かってきた。わたしなんて、家では何にもしないけど。彼は何でもやるって感じがする。

多分、お母さんと二人で暮らしてきたってこと、関係してるんだろうな。
わりと、大きくて古い家を維持していくのって、きっと大変なことなんだ。だから、彼は彼の父

がすべきことの肩代わりをして、今まで生きてきたんだ。

それがいくつの頃からなのか知らないけど、まだ小さかった彼が、そうやってこの家の中を歩き回っていた姿が思い浮かんだ。

「長内さんは、紅茶でいいのよね。」

「はい。ありがとうございます。・・・でも、どうしてご存じなんですか？」

「睦月が話してたから。長内さんて可愛い子が入部してくれて、嬉しいって。」

奥のほうから声がした。

「かあさん、僕そんなことひとつ言もいってない！」

「そうだったかしら・・・。でも、少なくとも顔には書いてあったわよ。」

また、奥のほうから声がした。

「長内が意識するとまずいから、もうそのへんにしといてよ。」

モウテオクレデス・・・。たぶん、今、私の顔はまっかっか。

「来るっていっといってくれれば、もうちょっとましなもの用意しといたんだけど。カステラ切ったから。きっと腹減ってるだろう。」

こくこく。ぱく。おいしい。

「睦月がカステラ好きなの。だからね、いつも置いてあるの。」

「もう、かあさん。あと、何バラスつもり。」

おもしろい。

「あの、おばさま。どうして私って分かったんですか。」

「睦月が写真見せてくれたの。えーっとね、お友達とお茶しながら、ふわーっとどこか遠くを見てる写真だったわね。いい写真だった。睦月の最高傑作よ。」

それって、わたしが持ってるはずだよね。越名くん。ねえちょっと。どういう手品を使えばそういうことが出来るわけ。

「長内に返す前に、一枚だけ引き伸ばしたんだよ。・・・処分するって、嘘ついてごめん。でも、あれはどうしても捨てられなかつたんだ。」

また、ちょっと雨強くなったかな。アジサイが重たそうだ。

「よかった。」

越名くんもそんなにしょげないでよ。

「越名くんが、完璧な人じゃなくて。」

今ならその気持ち分かるな。どんないきさつにせよ、自分が撮った一枚を処分するのって必死だ。

「欠点のない人なんて、わたし、緊張しちゃって付き合っていけないよ。」

彼にもそういうところがあるんだって分かって、わたしはホッとした。ホッとしたついでに、今日撮った写真を見たいと言った。本当は、彼を見て欲しかったんだけど、そういうのが恥ずかしかったので、ただ見たいと言ったのだ。

「それじゃ、写場に行こうか。オレの部屋にもあるにはあるんだけど、長内を招待する心構えが、まだ出来てないんだよ。」

だんだん分かってきたんだけど、学校にいるときの彼は、一見肩の力の抜けたようで、頼りないぐらいふにやふにやしてゐる。でも隙がなくて負けず嫌い。今日見ている彼は、細やかな心遣いで神経を張り巡らしている。でも、弱点だらけ。こういう使い分けって、なんなんだろうな。

「広いね。」

「ま、十人ぐらいでまとまとった写真も撮れるんだよ。」

「もう使ってないの。」

「写真館は廃業したからね。スタジオとしては使ってない。でも、オレ自身はこの雰囲気好きだから、よくここにいるよ。古いカメラとともに一杯置いてあるでしょう。半分道楽みたいな仕事だったんだろうね。」

薄暗い部屋だけど、彼がカーテンを開けるたびに明るさが増していく。窓は天井まで続いていて、天気のいい日だと向こうの壁まで日が差し込むのが見えるだろう。

「こういう、古い建物独特の雰囲気あるね。なんて言うか、わたしと越名クン以外の人が居つていそうな。」

「長内は大丈夫なのか、そういうの。」

「好きじゃないけど、このスタジオには、悪さをするようなのは居ない気がする。」

なんかわたし、好き勝手なこと言ってない？ そんなの分かるような、靈感みたいなのが全くないのに。

彼はスタジオにくつついている小部屋のドアを開けた。

「うわー、難しそうな本で一杯だね。」

「殆ど祖父さんの。カメラと、ケーブル持ってる？」

「あ、持つてない。撮るだけのつもりだったから、持つてこなかった。」

なーんだ、って顔。わたし、またやっちゃったよー。かっこ悪い。

「ハハ、長内らしいな。でもあきらめるのは早いよ。ケーブルなんて汎用品使ってる機種が多いから、搜せば合うのがあるかも知れない。・・・これ、USBだから、こいつなら・・・ささった。大丈夫見れるよ。」

頼りになります部長。

「へえ、雨つぶ撮ったのか。・・・マクロの使い方覚えたんだな。」

テレビみたいに大きなパソコンの画面の光が、彼の顔にぼーっとした光を放っている。彼は無言で右手の指を動かし続けた。

「長内の写真が、わたしを見てって言ってる。・・・オレより上手いんじゃないか。」

ついさっき、わたしは雨の中の孤独に泣いてしまった。それが写っているんだろうか。

オレより上手いなんて、それはお世辞って分かってるけど、それでも嬉しかった。確かにわたしは自分の撮った写真が好き。誰のよりもわたしのが好き。

でも、彼の写真は、一瞬でわたしを引き込む。色の美しさに息を呑む。どうしてこんなものを見つけるのって驚いてしまう。

「淋しかったのか？」

どうして彼は、そんなことまで分かってしまうんだろう。わたしは、ただ一度、こっくりと頷くしかなかった。



「長内さん。晩ご飯食べていってくれる？ 大したおもてなしは出来ないけど。」

「はい。喜んで。」

「良かった、じゃあガンバろーっと。おうちの方に、お電話しとかなくちゃね。」

これで、家に帰るのを少し遅らせられる。

「ありがとう。」

わたしがお呼ばれするのに、越名くんがどうしてありがとうなの。

「いつも二人だから、張り切りようがないんだよ。長内が一緒に食べてくれたら、テーブルも賑やかになるし。の人、息子なんかつまんない、料理を教えることも出来ないって言うんだぜ。ひどいだろ。」

「あ、わたしお手伝いしてくる。」

「そういうつもりで、言ったんじゃないよ。」

ふるふるふる。

「わたしのお手伝いしたいの。」

わたし、あのお母さん好き。

お手伝いします、って言ったのはいいんだけど、多分足手まとい。

料理なんて、家庭科の時間にしかやったことない。それでもエプロンをつけて貰って、包丁を握って、タマネギ、人参切って。きやあ、とかいって大騒ぎしたけど楽しかった。

「睦月、ハンバーグなんか好きなのよ。子供でしょ。」

おばさま、それ以上彼の秘密ばらして良いんですか。わたし責任持てません。

食事の時間に、こんなに話したのって久しぶり。気がついたらテレビもついてない。なのに賑やかで楽しい。夕食ってこういうものなんだ。

おばさまはそこまでしなくてもいいっていったけど、洗い物も手伝って、それはわたしがこの人の側にいたいと思っただけなんだけど、その間、彼がどこかに消えていたのに気がつかなかった。てっきり、テーブルでお茶でも飲んでいるんだと思っていた。

どこに行ったのかな。もう帰るのに。

人の家の中を勝手に歩き回るのって、良くないんだろうけど、帰るって、一言ぐらい言つとかないよ。

わたしがこの家の中で知っているのって、トイレと写場ぐらいなんだけど。
・・・やっぱり、明かりついてる。

「越名くん。」

「ん？」って言う声が、小部屋の方からした。そういえばカメラも置きっぱなしだった。

「なに見てるの？」

「祖父さんのノート。」

茶色に変色した紙。青い万年筆のくせのある筆跡。暗号みたい。

「最初は読むのに苦労したけど、慣れるとそれほどでもない。そんなに顔しかめるほどでもないよ。」

「何が書いてあるの。」

「前に、祖父さん物理の研究してたって言ったよな。そういう関連のことが書いてある。」

「えーと、確か反物質の話をした時だったっけ。」

中身はもう忘れました。

「そうだよ。祖父さんもそういう方面の研究者だった。でも祖父さんが追ってたのは物質じゃないんだ。」

「物質じゃない？」

「そう。靈魂なんだ。」

「ちょっと、遅くなってしまったわね。おうちの方に叱られないかしら。」
「ぜんぜん平気ですよ。」っていうか、もっとこの家にいたいんだけどな。
うわー、なにこのクルマ。見たこと無い。

「ぼろいクルマで悪いな。母さん、いい加減買い換えようよ。」
「あなたが免許取ったらね。わたしはこれしか運転できないの。」
あちこちの鉄板がむき出しだ。座席も布。あれ、あれ、なんか違和感。運転席、逆？

「あら、まだだわ。」
「しょうがねーな。」
越名くん、クルマ降りてどうするの。これから行くんでしょ。

「せーの。」
どかん！
蹴った、クルマ蹴った！　ぶるぶる・・・って、蹴ってエンジンかけるの、このクルマ。信じられない。

「ちゃんと修理だそうよ。どうせ、ケーブルかなんかの接触不良だよ。」
「森田モータスが、梅雨の間は、腰が痛むから修理は嫌だって。」
「クルマも修理屋も、ポンコツなんだから。・・・ったく。」
「走ってる間に止まったりはしないから、心配しなくて大丈夫よ。」

前の席から振り向いた、おばさまの笑顔を信じます。

「エアコン効かねーし。」
「雨上がりってるから、窓開ければ大丈夫よ。ごめんなさいね、普段はこんなこと言わない子なんだけど、女の子の前だから、かっこつけてるのね。」
「母さん！」

短い夜のドライブだったけど、それはとっても楽しかった。でも玄関まで行って、ご挨拶をというおばさまの申し出をわたしは固辞した。

ウチの母に合わせたくなかった、と言うよりも、その時のわたしの顔を見られたくなかったから。

その時わたしは、幸せそうな子供の芝居をするだろう。それは、わたしにとって、もっとも苦

痛なことなのだ。

いつものように鍵を開けて、ただいまも言わずに、階段を上がった。廊下の奥のキッチンに明かりがついていたけど、帰ったのかと問う声も無かった。

ベッドに横になり、帰りぎわに彼が話したことを思い返していた。

「オレの祖父さんは、科学者のくせにどういうわけだか、靈魂なんて物の存在を信じてたんだよ。信じてたって言うより、信じようとしたって方が正確かも知れないけど。」

「そういうことが、ノートに書いてあるの？」

「そう。祖父さんの奥さん。つまりオレの祖母さんを若い頃になくして、それに会いたかったんだろうな。そんなことが書いてある。靈魂なんて信じる？長内は。」

ふるふるふる。

「前に、友達と心靈写真の話が出て、あれって本物なのって聞かれたことがあるけど、そんなの分からぬよ。わたしに聞くのがどうにかしてる。」

「まあ、99%は偽物って言うか、もしくは違うもの、単なる光のいたずらだろうな。」

「99%って、・・・じゃあ本物もあるって事なの。」

「世間で言ってるのとは違う意味だけどね。」

「どういうこと。」

「あくまでも、祖父さんの仮説だよ。そう思って聞いてくれ。

祖父さんは人の身体には魂が宿っているって思ってた。これって、証明されてはないけど、案外みんな信じてるよね。だから、この考えは突飛でもないんだ。

でも、ある時、ある矛盾に気がついたんだ。人は爆発的に増え続けている。その人に魂が宿っていたら、その魂ってどうやって発生しているんだろうって。

人は生殖で子孫を増やし、他の生物を食べて成長する。でも魂って生殖や細胞分裂で増えるものではなさそうだ。何らかの存在なんだろうけど、何を元に増えているのか？ それが分からぬ。

この世に存在してるって事は、たんなる思念ではないんだ。何らかの観測不能な物質なのかもしれない。それとも物質とは違う未知の物かも知れない。でもそれは何を原材料として増えているのか。」

わたしの頭ではついて行けません・・・。

「祖父さんは物理の研究者として、何か他に似たような物はないかと考えた。たどり着いたところが、物質と反物質の関係。それを最初は“靈魂と反靈魂”って呼んだんだ。」

わたしが話したのは、そんな分子とか原子みたいな話じゃなくて、たんなるオカルトもどきなのに。

「靈魂は何かのきっかけでこの世に生み出され、そして同時に反靈魂も生まれる。元はなにも無い。でも、陰と陽二つが存在することで、バランスがとれている。どんなに増え続けても、全部合わせれば“無”になる。そういう存在を直感するのに、それほど時間は必要なかったって。だってほら、この部屋にいっぱいあるだろうそういうの。」

この部屋に？

わたし、昼間に何か居そうって言ったのって冗談だよ。そういう雰囲気の古さだって言っただけだよ。ひょっとすると、目に見えないけど、この部屋の中に靈魂がうようよしてるって事。

止めてそういうの。わたし、ダメなんだって知ってるでしょ。

彼は机の上のファイリングを取り上げ、中からフィルムを取り出した。

「これ。ネガと、そして・・・ポジ。」

彼があの時、二つを重ねると無になるって言ったのはそういう意味だったのか。

「だから祖父さんは、このノートの中で反靈魂のことをネガティブズって呼んでる。」

結局そのあとに、車で送るからそろそろ帰った方がいいと、彼のお母さんが言いに来て、その話はそれっきりになってしまったんだけど、わたしの中ではそれが小骨のようにずっと引っかかっている。待てよ、わたし、サカナの小骨を実際に喉に引っかけた事って有ったっけ。

ふわーあむ・・・・また、あくびでた。

「おっはよう、ツバキちゃん。」

「ご機嫌だね、アミちゃん。」

「どうしたのヘビーな顔して。」

「ちょっと寝不足でふー。」

ホント、中途半端で終わった話って、夢にまで出てくるんだもの。わたしの安眠はどこへ行った。

「お見合いどうだったの？」

「クラブで会ったんだけど、大学生だった。向こうはワタシが高一って分かってないみたいだったけど。」

また、すごいかっこして出掛けたんだろうな。マスカラとかびしっとつけて。

「で？」

「うーん。二三回ぐらいなら付き合っても良いかなー。軽薄そうだからね、それぐらいしか持たないと思うんだあ。大学生なんて、中身ないからねー。それでも高校生よりはましかなー。」

せっかくの夏が目前なんだから、今年は絶対海に行くの！

もう、ションベン臭いプールなんて行かない！」

おいおい、周りに聞こえるって。ここ駅だっての忘れてる？

「なんかさあ、繁殖期になると奇麗な羽根を見せびらかせてメスの前で踊る鳥って居るじゃない。あんな感じなんだよねえ。わたしがよっぽどバカに見えて、それに合わせてるだけなのかもしれないけど、なんていうか、、、別れて5秒で忘れそうな気がする。」

「アミちゃん、この間の人みたいなどと、傷つくのアミちゃんの方だよ。もうちょっと選んで付き合えばいいのに。」

たまには、わたしもいいこと言うなあ。成長したのかな。

「じゃあさー。」

なに、その意味ありげな視線。

「越名、譲って。」

ゆ、譲ってて、それどー言う意味。しかも耳元で。わたし、別に彼の所有者でもなんでもないし。

「だって、彼、資産家なんですよ。それに、要領良くて、世渡り上手そうだし。ワタシ、ピーンと来たんだ。これは百年に一度の邂逅だって。」

ゆづるとかそんなの・・・。はうー。しかも邂逅なんて、ソラでかけないような難しい言葉使って

「ほーら、てんばった。・・・冗談だから。ツバキかわいっ！」

なんだ、からかわれただけか。そうだよね、アミちゃんみたいなかわいい子が、大学生ならともかく、あの写真オタクの口バくんじゃ、釣り合わないよ。

「で、どうして、そんなにどんよりしてるわけ。」

アミちゃんには隠しごとしても、全部バレちゃうから、もう正直に話してしまう。かくかくしかじか。

「ビックリー、もうそこまで進んじゃったの。ワタシですら、男の家なんて行ったこと無いのに。やっぱり経験のない子って、歯止めがはずれると行くとここまで行っちゃうのね。

ダメだよ、ツバキ。ちゃんとブレーキ踏まないと。・・・あっという間にぬかみそ臭くなっちゃうよ。」

そんなことしてない！

「ネガティブズか・・・、また妙なこと考えついたものね。」

一ヵ所だけ、線路の上を高速がまたいでるところがあって、そこを通過するとき、窓の外が暗くなり、つり革を持ったわたしとアミちゃんが窓に映った。

一瞬、わたしの背後に、何か黒い影が写っているような気がした。



「ふっ、くっくっく・・・腹イテー。」

「もう、笑わないっていってたのにー。嘘つき、越名のバカ！」

「えー、だってさー。そんなのありえないよ。電車の中でネガティブズなんて、話すぎ。美味しすぎるー。」

平気で男子を越名って呼び捨てにしてしまう、わたしにもびっくり。

「もー、今度、越名の家に行ったときに、おばさまに言いつけてやるから。」

「えー、また来るの。そりゃ母さん喜ぶよ。でもさ、雨の日は遠慮してくれ。オレまたお前の足拭かないといけなくなるから。ひーっひっひ・・・。」

ばかにして！　ふんだ！

「あー、そうだ、この間、雨降った日の写真。プリントしてみたけど。」

えー、どれどれって、さっきの憤慨はどこに行ったのわたし。

こんなだから、越名くんにバカにされるんだよ。

「一応、オレなりにコントラストとカラーバランスの調整ぐらいはしてみたけど、インクジェットだからね。ネガより上、ポジより下ってぐらいの出来かなー。はいよ。」

あ、紫陽花が。。。色がきれいにでてる。これ、このあいだわたしが撮った写真だよ。ねえ越名くん。

「だから、分かってるって。落ち着けよ。」

わ、ちょっと・・・ジャングルジム、こんなだったかな？

「それ、かなりコントラスト強くしてみたんだ。もう元の色が破綻するぎりぎりぐらいまで。何でか分かるか？」

「わかりません。ぶちょー。」

「珍しく声だしたと思ったら、ぶちょー、はないだろ。まあいいけど。

写真で撮って終わりじゃないって事。プリントするまで責任を持つ。それが写真。焼き方によって、ぜんぜん印象って変わってくるもんだよってことを言いたかったわけ。」

本当だ。もっとほのぼのイメージだったんだけどな。奥深いんだなー、写真で。

「ネガティブズなんて、そんな簡単に見れるもんじゃないんだよ。むしろ普通は見れない。だから証明のしようがない。」

祖父さんの仮説なんて黙殺されたさ。学会を離れて何年も経つ写真館のオヤジの話なんて誰もまともに取り合わないよ。祖父さんも、それ以上の証明のしようがなかったから、その話はおとぎ話で終わるはずだった。

でも、ある時、長内の言う心霊写真みたいなのガラス板を持ち込んだ人がいたんだよ。今だったら、オーラって言うかも知れないエクトプラズムって言ったかも知れない。

でも、祖父さんが自分で焼き付けをしてその写真をみたら、どうも傷んだ蛇腹から漏れた光が干渉して、そうなってしまった写真だったらしいんだ。

持ち主もそれを聞いて、安心して喜んで帰ったらしいんだけど、祖父さんにとってはそれでは終わらなかったんだ。

心霊写真の話は、他の写真屋からも耳にしたことがあって、殆どがさっきのと同じように、光が漏れたり現像ムラがそういう風に見えたりするのなんだけど、どうにも説明のつかない物が時々見つかるってね。それって、ひょっとしてネガティブズが、実際に特定の光、あるいは電磁波や磁界の干渉を受けて、增幅された波が人には見えないけれども乾板を露光させているんじゃないかなって考えたんだよ。

「靈魂が人の肉体に宿るものだとすれば、逆にネガティブズって、人の体外にまとわりつくものじゃないだろうか。それは人の目には見えないけれど、何らかの目に見えない粒子で出来ていて振動している。それが有る特定の周波数の電磁波の干渉により、可視光線外の光を增幅し、フィルムに感光するんじゃないだろうかってね。」

「分かりません。」

「物理嫌い？」

うんうん。

「右手出して。」

なに。あ、掴まれた。きやあ。

「かるく上下に振って。」

なにさせるかな、もう。いち、に、いち、に。

「オレも振るよ。」

うわ！振りが大きくなつた。

「逆位相でふるよ。」

手が止まつた。腕だけ動いてる。

「これが波の干渉。位相が合えば増幅されるし、逆だったら打ち消し合う。光って波だからね。」

」

「あっ！ごめん、お邪魔だった？」
「いや、問題ない。人体実験してただけだから。」
変な言い方しないでよ。

「良かった。ちょっとかくまって。」
かくまう？ なんだか廊下でどたどたと足音がする。なんか来た。

「おい、写真部！」
「よっ。」
あいつだ。

「よじやねー！アミ居るだろうアミ・・・。アミ、出てこい！」
「居るよ。」
ぶちょお、そんなー。アミがかくまってって言ってたのに。薄情者。

「アミ出てこい！俺をシカトしやがって、ゆるさねー。オイ、出てこいよ。いるんだろおい！」
なんのよ、こいつ。目が血走ってるよ。アミアミ言うな。

「なあ、アミー出てきてくれよ、淋しいんだよー、オレはお前が欲しいんだ、アミー。優しくしてやるからさあ、アミー。・・・アミー！」

バン！
「うっせー！」

びっくりしたー。越名クン、どうしたの。そんなで机叩いたら、机割れちゃうよ。

「ひっ！う、うぐっ。」
あ、あれ。帰っちゃった。あれ？どうして。

「貴嶋さん、もう出てきて良いよ。」
暗室に入ってたんだね。よかったねアミちゃん。

「ありがとう。助かった。一時はどうなることかと思ったんだけど。」

「貴嶋さん、キミ、クスリやってないよね。」

「無い無い。ワタシそんな子供じゃないよ。」

「あいつは？」

「そういう噂、聞いたこと有る。実際にしてるところ、見たわけじゃないけど。」

なんの話？お薬って。

「膚も口もぼろぼろだし、目の焦点合わなくてきょときょとしてた。なんか情緒不安定って言うか、怯えてる感じだったし。あれ、典型的なクスリやってるやつの症状だよ。特に、聞き慣れない音とか、後ろを怖がるところなんかね。」

「どうしてそんなこと知ってるの。」

「ふー・・・、その本棚の中に、そういう写真も有るんだ。もちろん、オレンチにもある。そういう奴らを、興味本位じゃなくて向き合って、写真に撮ったカメラマンが居るんだよ。」

「今のあいつよりもっとひどいけど、でも、一発で分かった。貴嶋さんなら分かってると思うけど、あいつとは関わるな。中途半端なお情けで、どうにかなる問題じゃないんだ。これはアイツとあいつの保護者の問題だから。」

「そうだね。アイツも可哀想なやつだとは思うんだけど・・・、ワタシも一時期危ないとき有ったからなー。クスリじゃないんだけど、女の子って、もっと色々あるっしょ。」

「でもね、あと一步だったかもしれないけど、こっち側に踏みとどまつたんだよ。ツバキと一緒にいたかったからね。だから、ワタシはああいうのに巻き込まれるのはごめん。」

また、二人だけに分かる話して、つまんない。

こら、勝手に見るな。いじいじ・・・。

「この写真。越名くんのじゃないよね。ということはツバキちゃんの写真？へえーすっごいじゃない。お母さん感激よ。へえー、へえー、あらー・・・あ。」

なに？見せなさい。スニーカーの写真か。

なに、ワタシの顔に何かついてる。

「ツバキ。ワタシこれと似たような写真見たこと有る。それはね、ペンキの付いた靴の写真だった。アンタのこれ、それと同じぐらいすごいと思う。ツバキ、見つけたね自分のやりたい

こと。」

褒められた？褒められた！なんか、アミちゃんにそう言ってもらえると嬉しい。

「師匠が良いからね。」

「良いこと言ったんだからさ、ギャグにしないでよね。」

「こりゃ、失礼。 そうそう、この間撮ったの、見せろって言ってたよな。 · · · たーしーか、この辺りに入れといた · · · 有った有った。」

部長、ホントにマメだね。わたしの写真プリントしてくれたり、アミちゃんの写真現像したり。同じように学校生活してるとはとても思えないよ。いったい、いつ部室に來てるの。でも、椅子から立たないんだね。

アミちゃん、自分で見てないで、わたしにも見せてよ。

「・・・これ貰っていいの？」

「どうぞ。お気に召したのなら。」

「越名って、女の子は撮らないとかいってたよね。」

「うん。興味ない。」

「そっか・・・残念だなあ。」

・・・アミちゃん、それって越名くんに写真を撮って貰いたいって事、だよね。アミちゃんの心の複雑さって、わたしみたいなおこちゃまにはよく分からないけど、アミちゃんて欲張りだよ。カレシが居て、男友達もいっぱいいて、わたしなんか部長ぐらいしか話すあいていないのに。しかも、ショッちゅう笑われて。

「もうちょっと、ここにいていいかな。今日はちょっと、怖いんだ。」

「貴嶋さんは部員なんだから、好きなときに来て、鍵開けて、ちゃんと閉めて帰ってくれるんならいつ来てもいいんだよ。」

「あ、そうだった。わたし写真部員ていうの忘れてた。」

今のマジっぽい。

「ま、ツバキちゃんの邪魔しない程度に、出席するようにしようかな。最近は放課後もいろいろ忙しくって。」

「デート？大学生のカレシと。」

「ううん。バイト。ブティックで売り子やってるの。」

「高校生がそんなこと出来るの？」

「十八才、フリーターって事にして貰ってる。わたし中学の時、一週間だけど水商売のバイトやったこともあるよ。カウンターの中だけね。ニコって笑って、お水出したり、おしほり出したりするの。」

ヒエーーー。私服だったら、ぜんぜん違和感ないかも。

「割は良かったんだけどね。ある時、お客様の娘がわたしと同じ中学に通ってるって話にな

って、つい、ああ、知ってるって言いそうになって、あっぷねー、こりゃダメだわ、と思って、辞めさせて貰ったの。マスターも何となく分かってたみたいだから、一週間分のバイト代だけくれて、三年経ったらまたお出でって。」

部長、またカメラの分解掃除してる。

「でも、アミちゃんてば、全部女王様デートって言ってたじゃない。お金なんているの？」

「デート代ほしさじやないんだ。ちょっと買いたい物があるの。」

「バッグとか？でも、すっごいの持ってるじゃない。」

「だから、自分で稼いだお金で買いたい物があるって事。 越名くんは何かバイトしてる？」

「うん。スポットだけど、写真屋の手伝いとかさせて貰ってる。運動会とか遠足とか、時々スタジオの手伝いとかね。いろいろだけど、勉強になるし。」

みんな何かやってるんだ。わたしも何かしようかな。でも、この引っ込み思案な性格が問題だよね。

「じゃあ、将来はそっちの道に進むの。」

「まあね。微妙だけどね・・・。ウチの母親は、いつか写真館をもう一度開きたいと思ってるんだよ。あの人の夢だな。でも、オレはカメラもって世界中を飛び回りたいと思ってる。そのギャップがね、まあ、悩みの種ってわけ。貴嶋さんの悩みに比べたら、多分、ぜんぜんなんて事無いんだろうけど。・・・どっちかに決めればいいだけの話だから。」

アミちゃんの悩み？わたしそんなの知らないよ。

「そういうの、分かるんだ。」

「あれだけ、SOS出されたら分かるよ。」

その後、アミちゃんは本棚から写真集を引き出して、1ページ、1ページ、丁寧に見ていた。そこから、何かを吸収しようとするアミちゃんの真剣な顔だった。

わたし、もう二週間ばかりここにいるんだけど、そんなふうに見たこと無かったような気がする。でも、正直なところ、わたしは写真集を見ても、これは良いなとか、よく分からぬとか、そういうのしか感じられない。

越名くんは白い手袋をして、つながった帯のようなネガを一つずつ見ている。わたしはそういう二人を見て、ただぼうっとしてた。

「変な部活、ここ。」

「そうか？オレは助かってるけどな、長内が無口で。」

褒められてないよね、それって。

「ツバキちゃん。そろそろ帰ろっか。たまには、雪月花、寄ってく？」

「うん。行く行く。」

白玉金時、食べたい！ 夏はやっぱりかき氷。それに、今日はわたしがついてて、アミちゃん守ってあげないと。自分でこういうことを言うのはあれかもしれないけど、わたしって、きっと癒し系。

「じゃあ、部長。おさきー！」

「はいよ。」

折りたたみ椅子揃えてっと。コップも洗わなくっちゃ。暗室に水道と流しが有るの便利だよね。いちいち廊下に出なくていいし。

「アミちゃん、マイコップ持ってきた方が・・・・。」と、首だけ出して言おうと思った。

「部長。貴嶋さんじゃなくって、アミって呼んでくれる？」

「ん・・・オレいまんとこ、長内で手一杯だけど、それでもいいなら。」

「分かってる。そこまで頼る気無いから。」

「じゃあ、つかえないように練習しとくよ。」

アミちゃん、それどういう意味。それにわたしで手一杯ってどういうこと？

「じゃ、帰りにマイコップも買って帰ろうか。駅前の百均で。」

そんなでいいの、おしゃれなアミちゃんが。・・・ってわたしも、粗品の横流しだけど。

梅雨明けと時を同じくして、期末テストの期間が始まる。
さすがにその期間の部活は休みになって、我が写真部も部室のドアを開けることはない。

アミちゃんは、「保護者のプライドがあるから。」って、試験期間はカレシとのデートもバイトも休むんだそうだ。

フリーターが試験でバイトを休むなんて、変だと思うけどね。大学生のカレシも、この期間は前期試験とかでひいひい言ってるらしい。そういう言葉を聞くと、アミって大人だなーと思う。

部長って頭良さそう。

わたしはまた家にいる時間が長くなって、できるだけ親とは顔会わさないように、自分の部屋にこもって勉強してる。・・・勉強してるときもある。

いいや、やっぱり勉強はしてるぞ。母親は、ブログとかチャットとかをしてるらしい。どうせ娘と夫の悪口で盛り上がりってるんだろうな。どうでも良いけどね、所詮こんな家だし。

クラスが違って部活もないと、越名くんと会う機会なんて全くなくって、廊下とかですれ違ったりしないかなとも思うんだけど、そういうこともない。

眼鏡で視界狭いからかな。知らないうちに無視してたら、嫌なやつだと思われるだろうな。

眼鏡なあ。暑いと汗溜まるんだよね。テストで下向いてるとズルッと行くし。
毎朝、アミちゃんと話す以外、このごろぜんぜん喋らないな、わたし。

そーんな感じで試験期間が終わって、試験休みがやってくる。

その前に久しぶりに部室に寄っていこうっと。職員室で、まず鍵確認してっと。職員室のドア開けるのようやく慣れてきた。別に注目されるってわけじゃ無いんだけどね。何となく、気後れするんです、、、あ、まだ有る。越名くんまだ教室かな。

一階に下りれば、廊下の端っこにある写真部はすぐそこ。

暫く開けてないと、匂いこもってそうだな。がちゃがちゃ。ちょっとこつがある。ドアノブを上げ気味にすると、鍵が回りやすい。

オーっす。部室久しぶりー。待たせたねー。お湯わかしてお茶にしようねー、夏だけど。ここ生水飲むのちょっと怖いんだよー。

ああ・・・落ちつくなあ。

運動部とかもそろそろ走り出してる。これからひと夏、ずっと走るんだよねえ。すごいわ運動部。

校庭の照り返しまぶしい。

遅いなー、今日は来ないつもりなのかなあ。それならそうと言ってくれればいいのに。明日から終業式まで休みなんだよ。終業式会えなかったら、もうひと夏会えないんだよ。それでもいいの、部長。

あと部員二人集めないと、廃部決定なんじゃなかったっけ。ここが無くなったら、わたしましたどこにも行くとこ無くなっちゃうよ。かといって、そのために何か活動してるようにも見えないし。

自分が人任せなのは、この際棚に置く。だって、できないもの。

廊下に足音。なーんだ、来るんじゃない。もう、何時だと思ってるの遅刻だぞ！

「部・・・」長じゃない。あの人だ。

「何だ、お前か・・・。」

戸口に立たれると、逆光で顔が良く見えない。逃げ場がない。いざとなったら暗室に逃げ込んで内鍵かけて、でも誰か助けに来てくれるだろうか。普段は誰もここには来ないし。明日も休みだから、先生も生徒も少ないだろうし。外から鍵かけられて、ずっと閉じこめられたらどうしよう。

「オイ、アミは？」

入ってきた・・・いやだ、近くに来ないで。

「アミはいねーのか？また隠してんじゃねーだろーな。オイ。あいつは？」

逃げないと。逃げないといけないと思うのに、身体がすくんで動かない。

足が動いてくれない。

「ぶ、部長は、今ちょっとでてるだけ、すぐに帰ってくる。」

来ないで、お願ひ、そばに来ないで、こっちに来ないで。

「アミはどこだ、オイ。アミはどこにいるんだよ！」

「し、知らない・・・。」

「・・・んだと！」

「今日は来てない・・・。」

「ばっくれんじゃねーぞ！」

大きな声出さないで。誰か助けて、越名くん助けて！

「こっちの方に居るんじゃないのか。こないだみたいに。」

暗室・・・、今の内にとりあえず外まで出ないと。あ、こっち向いた、間に合わない。

「オイ。他に部屋はねーのか。」

無い、無い。首振るしかない。

「せっかくテスト終わって、バンドの連中呼んで、パーティでもやって、楽しくやろうと思って

たのによ。」

やだ、それ以上近付くな。後ろ壁。もう下がれない。

怖い。いやだ。

手伸ばさないで、触るな、わたしに触るな！

「なに、逃げてんだ。」

嫌だ、いや、いや！息臭い・・・なんか腐った匂いがする！

「何にもしやしねー、おめえ何か最初から無視だ。でもなあ、アミにいっとけ。これ以上無視したらぶっ殺す。なめんじゃねーってな。」

ぐすっ、ううっ、ぐふっ・・・・・・。

怖かったあ・・・怖かったよう・・・。

誰も助けに来てくれ無かった・・・。

ぐすっ・・・ごほごほ・・・。

もういやだあ・・・男なんかだいっ嫌い。

ぐすっ・・・。

もう帰ろう。もう、きっと誰も来ないよ。

職員室に鍵返して帰るんだ。

もう越名なんかに会わなくていい。

肝心なときに、何の役にも立たないんだから。

もう帰る。

写真部も辞めてやる。

どうせ廃部だし。

わたしなんか、どうせどこにも行くとこないし・・・。



その夜、怖い夢を何度も見て。朝、起きたときはずーっとぼーっとしていた。ベッドからずり落ちて、しばらくそのまま空を見上げてた。

アミちゃんにケイタイしたけど出なかった。デートか何かかなあ。だったら、連絡取っても仕方ない。眠ると、また怖い夢を見そうだから、寝ないようにしなくちゃ。

外、暑そう。何にもする気無いし、することもない。

昼ご飯はそうめんで、それ以外にはなにもなかった。すごい無気力な昼ご飯。でも、ありついただけまし。わたしがこんなにブルーになっているのに、この人は何も気にならないんだろうか。気づいていないんだろうか。

わたしが誰かの親になった時、こんな母親になったらどうしよう。もしそうなって、今日の事を思い出したら、わたしは悲鳴を上げるだろうか。それとも、そんなこともあったなあ、と思うだけだろうか。

顔や腕に日焼け止め塗って、水色ボーダーのポロシャツとデニムのスカート。ナチュラルのショルダーバッグにお財布とタオルハンカチと、、、カメラも入れちゃった。習慣て怖いな。

で、結局最後にひつめ髪に眼鏡。いけてないぞ、鏡のわたし。これで帽子かぶったら、誰だか分かんないだろうな。なんの特徴も飾りもない格好だもん。

「出掛けてくる。」

「この暑いのに。どこ行くの？」

だらけてる・・・。こっち向くとかないの？

「友達のところ。」

「何時に帰ってくるの？」

「分かんない。鍵持ってるし、ご飯とかいいよ、適当で。じゃ。」

ホント外暑いわ。

自転車にすれば良かったかなあ、でも自転車だと帰りに送ってもらえないかも知れない。

公園まで来た。これって、多分半分ぐらいは桜の木だろうな。前来た時は気づかなかったけど。緑色の三角は銀杏だ。それと痛そうな葉っぱの、これってなんて言うんだっけ。よく生け垣につかってあるやつ。

セミ、よく鳴く。

僕たちセミ取り？全部取り尽くしてね。取り尽くすまで帰ったらダメだよ。あなた達の勇姿は、お姉ちゃんが撮ってあげるからね。

「あ、お姉ちゃんカメラ？」

わ、ひとナツッコイ。

「そうだよ。」

「見せて見せて。」

ほら。

「わー写ってる。でもちっちゃい。パパのとちょっと違うなー。」

「パパは写真よく撮ってくれるの。」

「うん。」

いいパパで良かったねー。

「ほら、もうこんなに取ったんだよ。」

うわー、虫かごにセミが。ちょっとキモイ。近づけないで。いやー。

「お姉ちゃんセミ恐いの？」

「女の子は、大抵虫ってあんまり好きじゃないの。」

「へえー、面白いのに。なあ。」

「うん。」

「じゃあさ、お姉ちゃんが虫をいっぱい捕ったところを写してあげるから。そこに並んで・・えっへんてするんだよ。」

わー面白い。言ったとおりにするんだね。

「じゃあねー、虫取り頑張ってねー。バイバイ。」

暑っつー。

何か、子供と話せた。不思議。いままできっかけとか全然つかめなかったのに、普通に話して、ポーズまでとらせてた。

自分もそういう頃有ったのに、いまじゃ別の星の生物みたいに感じたけど、ちゃんと言葉通じた。

ペットでおでこ冷やそう。ついでに一口飲もう。首筋がもう汗でじっとりしてる。もう一口・・・もう一口。目的地に着くまでに、空になっちゃうかも。

この公園の、ここだけは草はえてない。みんなここ歩くからだろうな。真ん中で交差してるのも可笑しいな。これ、撮っちゃお。アングルとか気をつけろって言ってたな。角度のことだけ。

あのジャングルジムの上に登って撮ってみようか。・・・こんなの登るの久しぶりだけど、サンダルじゃちょっと無理かな。えーい、脱いじゃえ。もう猿も同然。

おーお。いい眺めだ。このままで一枚。アップにしてもう一枚。あー高いとこに登って、わたしアホだー。遮るものないから、メッチャ暑いぞー。

公園抜けたらもうすぐ。公園より木の多いお家。萌葱色に塗られた異人館。ついたついた。

あ、庭の木陰に誰かいる。おばさま？ より随分若いかな。

オーガニックカラーのコットンの、膝下まであるノースリーブのワンピ。スクエアネックで胸元が大胆だけど、同系色のロングキャミをボレロ風に重ねてカバーしてる。

栗色のロングストレートをセンターで分けて、後ろに流しておでこを出して、モデルみたいに格好いい。

親戚か誰かかなあ・・・わたしに気がついた。やだなー、こんな子供っぽい格好。見られたくないなー。知らない振りしようかな。このまま通り過ぎちゃおうかな。

わたしはただの通りすがりでーす。

「ツバキちゃん。」
手、振ってる？
「ツバキ。」
それ、わたしの名前だべさ。でも、どうして知ってるの。……ていうか、聞き覚えのある声。

「オサナイ ツバキ。」
ぐるぐる振ってる。

「あら、椿さん来たの。」
おばさま。

「こんにちは。お言葉に甘えて、遊びにきました。……けど、あの人誰ですか。」
「誰って。」
近くに来た。ええっ！

「もう、昨日も会ったのに、どうしてわたしのことシカトするかな。」
「アミ……ちゃん？ だよね。ええー！ ふわくしゃウエーブでダークチェリーのアミが、どうしてマロンのストレートなわけ？ それにあなたの私服って、十色以上は必ず有ったでしょう。しかも、スッピン！」
「スッピン言うな！」

あああ……もう昨日から何がなんだか分かんないよ。
あ！ 肝心なこと忘れるところだった！

「何で、部長の家にアミが居るの！」
「ち、呼び捨てかー。」

みーん、みーん、みーん、ジ————。

「まあまあまあ、二人とも落ちつきなさい。中に入って頭冷やそうね、椿さん。」
ホントもう、ぶつ倒れそうです。

夏はカルピスだなー。

ストローでちゅうーっと吸ってると、最後にずずつていっちゃうんだよね。今日は音しないよう気をつけようっと。氷の解けた水、吸うのも好きなんだけどな。美味しい訳じゃないのに。融けて残ってると、何度も吸っちゃう。

「ツバキは何しに来たの。」

「試験終わったから、おばさまに会いに来ようと思って。」

「ふーん。越名くんに会いに来たんじゃなかったのか。」

「違うよ。部長は一度も誘ってくれないけど、おばさまは、またいらっしゃいねって言って下さったもん。」

あくまでも、おばさまに逢いに来たって主張するわけです。この被告人は。

「よかったー、かぶらなくって。」

へっ？

「わたし、越名くんに写真撮って貰うの・・・正確に言うと、越名スタヂオで写真撮ってもらひに来たの。ちゃんとお金払うんだよ。」

、、、くんづけだよ。どういう風の吹き回しだろ。

「部長、女の子は撮らないとかいってたのに。」

嘘つき。

「それは、彼の趣味の世界のことだよ。今日は越名スタヂオの仕事なんだから、えり好みなんかしてられないよ。親友同士でかぶったらどうしようかと思ったけど、よかったー。」

金にものを言わせるとは、、、友達ながら、恐ろしいやつ。

「よっ！長内来てたのか。丁度良かった。」

「部長、昨日大変だったんだからね！・・・。」

って、話聞いてる？

「なんだか知らないけど、今日も大変なんだよ。アミが変なこと言い出すから、昨日から準備でてんてこ舞いでさ。母さんが勝手に受けちゃうんだもんな。勘弁してよー。」

へ、おばさまがどうかなさったんですか。

「だってー。一昨日の夜、越名スタヂオさんですか、撮影お願いできますかって、十年ぶりに電話なんかかかってきたのよ。まさか、二人の知り合いだなんて思わないし、もう二つ返事でOKしちゃった。

睦月も最近腕上げてきてるから楽勝でしょ、スタヂオ撮影ぐらい。」

「もう十年も使ってないのに。うちのスタヂオ。・・・長内助手やって。」

「わたし助手とか、何したらいいのか分かんないよ。」

「窓のカーテンの開け閉めだけでいいから。一度ファインダー覗き込んだら、離れてカーテン動かすなんて出来ないんだよ。今日のアミの格好だったら、ライト使うより、自然光をカーテンでコントロールした方がいいと思うんだ。」

えー、わたし大事な話しに来たのに。ちょっと、立ち止まって聞く姿勢とか見せてくれないかな。忙しいって言うのは分かるんだけどさ。

「わたしも賛成。越名スタヂオがこんないい写場を持ってるって知らなかった。今時の写場って、みんなビルの中だから、こんなこと出来ないよ。」

そなんだ。へえー。

「だから、昨日はブローニーのフィルム買いに行ったり、レンズ掃除したり、スポットメーターの電池代えたりとか、営業してたら日頃のメンテナンスで整備されてるようなことを一度にぜんぶやったんだから。もう、ぐったり。」

とかいいながら、アミとか、呼び捨てにしてるし。そういえば、この間そんなこと言ってたな。アミって呼んでとか。

それに、、、おばさま、うきうきと楽しそう。これじゃあ、撮影終わるまで私の相手なんてし

てもらえそうにないな。

アミちゃん、本当に別人みたいだ。

私服だと、二十歳っていっても通用するぐらいに見えてたのに、今は本当に無垢な少女って感じがする。ドビュッシーの「亞麻色の髪の乙女」だけ、ってこんな感じかなあ。

子供の頃からの付き合いだけど、こういうニュートラルな感じのアミって初めてみたかもしれない。小さな頃から巻き毛だったし。お母さんが美容師っていいなあって、そんなことぐらいしか思ってなかつたけど。

どうして突然写真を撮るなんて、言い出したんだろう。

髪をストレートにしたのと、なんか関係あるんだろうな。意味もなく、こういうことするとは思えないし。

「こっちから順番に一番、二番、三番。このヒモを引いてロールカーテンを上げ下げする。急ぐ必要ないからね、普通の速さで上げたり下げたりして欲しいんだ。やってみて。」

よいしょっと。がらがらがら、、、、ちょっとコツが、、、普通の速さってなに?、、、面白いかも。

「うん。それぐらいのスピードで。それと、レフ板をときどき動かしてもらいたいんだ。そこにおいてある白い板。」

パンツ履いて来ればよかったかな。ま、撮影中は私なんか見てないか。

この前来たときは、雨だったからよく分からなかつたけど、今日みたいにお天気のいい日は温室みたいに中が明るくて、エアコンをがんがん動かしてるんだけどね、って彼が言い訳するぐらいに少し暑さを感じる。

「ちょっとそこに立ってみて。バック見るだけだから、気合入れなくていいよ。」

「はーい。」

長い棒を手にして、彼女の背後に何枚かスクリーンを下ろした。スタジオっていろんなものあるんだなー。そういえばこういう背景って、写真やさんのショーウィンドウに飾ってあるので見た覚えがある。こんなふうになってたのか。

彼が選んだのは、サンドベージュと薄いピンクやグレーの混ざり合った岩肌のような背景だった。

「じゃあ、試し撮り。」

びっくりしたー。どっかでフラッシュが光った。二回、三回・・・・。自然光で撮るっていってなかつたっけ。

「補助光を当てるんだよ。窓からの光だけだと、・・・陰影が出すぎるんだ。アミー、来てくれる。」

あんなところにパソコンが。っていうことは、今のカメラとつながってるってこと？

すごい、本格的だ。、、、ここ本当の写真館だった。忘れてた。

でも、随分長い間閉めてたって言ってたよね、たしか。こう言うのも、昨日のうちに準備したのかな。

すごいな、男の子って。

「どうかな、こういう感じになるけど。」

「ふーん・・・いいんじゃない。少なくとも、私の意図は理解してくれたってことね。」

部長が、聞いても無駄かも知れないけどって表情で振り向いた。

「かあさん、ずっとそこで見てるの？」

「うん。」

にっこり。きやあ、素敵。

もう椅子に座ってらっしゃいますものね。

「はあ・・・参ったなあ。小学校の参観日以来だよこんなの。」

ぐるぐるぐるぐる、、、腕回したり、首回したり何してるので。

「わるいか、緊張してんだよ。」

に、睨まないでよ。でも、部長でも緊張することなんてあるんだね。

「お金もらってやるのと、趣味でやるのは違うんだ、、、。なんで、部員が部長を金で雇うんだよ。なんか間違ってるよ。」

「それが経済ってモノよ。」

こういうとこはいつものアミだよね。理屈になってなくとも、いいまかすところ。

「うし！ 撮影入りまーす。」

ドキドキドキ、、、私が何かするって言うんじゃないのに。

アミちゃんなんか慣れてない？ 子供のときの経験？ どうもそれだけには見えないよ。

「じゃあ、 まず全身から。」

「根性なし。」

「うるせー。」

「長内、 1番半分ぐらい上げて。」

よーし、 出番だ。

「そんな感じ。 2番を三分の一・・・オッケー。」

パシャッ。

あのカメラ、 箱みたい。 上から覗くのか。 いろいろあるなー。

「足開く・・・指半開きにして。」

パシャッ。

「横も撮ろうか、 左向いて。 お腹の前で指組んで、 腕もうちょい上。 長内、 三番ゆっくり上げていって。」

がらがら・・・、 光がどんどん強くなってくる。

「止めて、 あごちょい上げる。」

パシャッ。

「部長、 ちょっとぐらいモデル褒めてよ。」

「そんな余裕、 ねーよ。」

パシャッ。

え、 今のも撮ったの。

パシャッ。 いい音。

「ゆっくり回れ右して、 うつむき加減に。 二番も上に上げて。」

はいはい！

パシャッ。

「アミ、 脱いで。」

「ええっ！」

「ごめん、間違えた。ミュール脱いで。かかと上げ気味で、もう一度前向いて。髪をちょっと前に持ってきて、ストップ。」

パシャッ。

「じゃあバストアップ行くから、長内カーテン下ろして。」

きゃあ忙しい。

「目線こっち。口閉めすぎ。それわざとだろ・・・。」

パシャッ。パシャッ。

「だって、褒めてくんないんだもん。」

パシャッ。

「あのさ、ここあけられる？」

えー、部長、それセクハラ！

「大丈夫。ストラップなしのつけてるから。・・・これぐらいでどう。」

「オッケー。鼻血でそう。・・・へらへら、わらわないので。あご引いて、眼だけこっち。」

パシャッ。パシャッ。

「三本撮ったし、ちょっと休憩しようか。」

「わたしあまだ大丈夫だけど。」

「カンベンしてくださいよお客さーん。」

「アミちゃん余裕だね。」

これ、撮影用のテーブルかな。それにミントンのティーセット。さすが資産家のご家庭。

「アミ、やってるだろう、今でも。」

「ふふーん。親に内緒でね。‥‥っていっても、美容室のチラシとか、スーパーの広告とか、その程度だよ。昔のツテで小遣い稼ぎさせてもらってるの。学校にも内緒だから、ばれないように地元は避けてるの。」

部長、渋い顔だね。どうしたの。

「手馴れたモデルに、いいようにあしらわれてる新米カメラマン。オレ、ちょっとは自分の写真に自信が出てきてたのに、ファインダーの中で、これ撮れる？って感じで挑発されて。撮らざるをえないって感じでシャッター切って。もうぐだぐだ。」

へーそうなんだ。

「そうだよね、撮り逃したのもあるよね。」

「そういうなー。」

「でもね、えっ、ていうのもあったよ。ここ撮ったの？っていうのも。出来上がり見るの楽しみ。」

「オレなりにがんばってるの。」

「オレなりでいいんだし。どっかで見たような写真を撮って欲しくって、髪の毛ストレートにして、メイクおとして、服の趣味変えてきたわけじゃないんだから。さっき脱げって言われたときは、さすがにドキッとしたけど。」

「だから、間違えたんだって。」

「惜しかったねー、もうちょっとで脱いでたのに。」

「ああもう‥‥。再開しまーす。」

すたすたすた。行っちゃった。

私、同じようにしてたらいいの、部長。

「いいようにあしらわれて、慰められて、ざまあないよ。」

「そんなことないよ。だって、アミちゃん見限るの早いもん。子供のときからの付き合いで、何

度も見てきたし、そういうとこ。」

「・・・ん。サンキユ。」

「ねえー、どこに立つのー、今度はー。」

「窓際行って。」

「逆光だよー。大丈夫ー？」

「モネは逆光を味方につけて、絵画を革新したんだ。逆光コワがるカメラマンなんて、一生レンズフード磨いてろって。」

強気の部長だー！

ああ、でも、体の輪郭が光ってきれい。特に髪の毛なんか。これが写真になったときどうなるんだろう。アミちゃんミューズみたい。

「こら、まだ動くな。」

「へぼカメラマン。」

「うっせー、お前気が短すぎ。」

「だって、花咲く乙女は命短しなんだもーん。」

「意味分かっていってのか？」

「今の空振り。フィルムもったいなーい。」

やってることと全然違うけど。・・・・あれ、止まっちゃった。

「長内、カメラ持ってて。」

はい。センセイ。お、重い。これもってやってるの。

アミちゃんの側に行った。

「ちょっと、いいかな。ぐしゃぐしゃにするけど。」

「うん。越名の好きにしてくれていい。」

うわー、髪の毛が鳥の巣になっちゃった。

「睦月、これ。お庭でとってきたの。」

かわいい、かすみ草みたいな花。髪に挿すんだよね。

「カメラ！」

巨匠、どうぞ！

カシャ、カシャ、カシャ・・・。

アミちゃんも、よくあれだけいろんな表情出せるな。それに、すっごく可愛い。

「よし、二番だけ上まで上げて。かあさんブラシ頂戴……。わるかったな、手でぐしゃぐしやにしちゃって。」

「何度もいわないでいいの。好きにしていいって言ったでしょ。」

「上から光りを落とすから、そんな感じで。」

「うん、わかった。」

カシャ、カシャ、カシャ……。

今度はおっきい脚立。

「上から撮るから。」

「祈るの？」

「違う、上向いて両手を広げて、光を浴びて。祈るってがらじやないだろ。」

「失礼ね。こんな感じ？うわ、まぶしい。」

「ちょっとは耐えろ。」

カシャ、カシャ……。

その後、フィルムを使い切ったとかで、デジタルに切り替えて。一体何枚撮ったんだろう。机の上、付け替えたレンズとフィルムがごろごろ。椅子の上で、天井を仰いでへばってる巨匠。

おばさまは、「二人とも夕食を食べて帰りなさい。」といって、買い物に出かけられた。

「アミちゃん、イメチェンしたの？」

「うーん、この前、越名に見抜かれちゃったからね。そのままでいるのも癪だし。私の本当の顔ってどんなだったかなーって、いろいろ探してみたんだけど、やっぱよくわかんなくて。越名に頼めば見せてくれるかなと思ったんだけど。」

そういうの、写真でみれるものなの？

「そういう意味でなら、今日は失敗かもな。そういうのは引き出せなかったと思うよ。」

「最初はどうなるかとおもったけど、気持ちよかったです。だんだん、私も乗せられちゃったし。やっぱ、スーパーのチラシとはちょっと違うわ。」

「そういうのと比べるなよなあ。」

「十六才にしちゃ、上出来。」

「はいはい。」

「わたし可愛かったでしょ。」

「うん。長内がいなかったらやばかった。」

え、わたし？

「ちくしょー。天然には勝てないかー。」

なんのこと？

「アミちゃん、あんなにモデル嫌がってたのに。」

、、、アミちゃんが、保留してる。こういうこと記憶にない。いつもはぽんぽん返してくれるのに。

「えー、うんー。そうなんだけどね。生きてくために背に腹を代えられないときって、あるのよ。

濡れ手に粟の金を手にした道徳感のない親って話し、前にしたよね。

その親が、ギャンブルに手を出したり、外に女作るまでそれほど時間からなかったの。そんなごたごたがあって、親が離婚したのがちょうど中学に入る頃。

母さんは精神的にまいってて、店を開けたり開けなったりっていう日が続くから、収入も安定しなくて。しょうがないから、自分で内緒で電話して、昔のつて頼って仕事紹介してもらったの。ギャラの交渉とかも自分でやったのよ。嫌な思いも一杯したけど、生きてくために必死だったから。」

「そっか、大変だったんだね。」

わたし、そのころもうアミちゃんと一緒にいたのに。分からなかった。いまでも分からぬかも知れない。

「、、、それはまだいいの。仕事だから。もっと大変だったのは、母さんよ。

あなたが可愛いのが悪いんだ、とまで言われちゃった。父親は出て行くし、母親には否定されるし、そのときが一番つらかったなあ。

家族がばらばらになったのって、私のせいだって言われたんだ。それも親からもらった自分の顔のせいだって。あの時は、もう、死んでしまったかった。」

「アミちゃん、だめだよそんなの！」

「昔のことだよツバキちゃん。それにツバキちゃんのおかげで、いまもこうして生きてるんだよ。」

わたし？

「顔も見たくないみたいに扱われるときもあれば、すごくやさしくされるときもあった。同じ人間のいいところと悪いところ、表と裏、全部見たような気がしてた。

いまはどうしてそうなったのか、理解できるけど。

その頃からかな、誰に対しても自分を作るようになったのって。分けわかんないけど、とにかく自分を守ろうってしたの。あの子はああいう子だからって言うことにして置けば、それを否定されても、傷つけられても、本当の自分じゃないから、なんてことないのよ。

ツバキはね、わたしがどんなときでもアミちゃんて呼んでくれて、変わんなかった。ツバキちゃん用のアミちゃんが、一番気楽でだらだらしてて、わたしが他のこと一緒にいるときに自分作ってても何にも言わなかった。だから、ツバキと一緒にいたかった。

でも、作った自分を越名に見透かされて。見透かされたら裸にされたみたいに恥ずかしくなって。こんなの始めてだったから。」

「ごめんね分かって上げられなくて。」

「だから、アミは長内にそんなこと期待してないんだって。」

「ああ、もう、、、参ったなあ。本当に好きかもって、思った男の指定席には親友が座ってて。
」

それって私のこと？

「わたし別に、部長のことそんなふうには思ってないよ。」

「やーい、振られてやんの。」

「ひでーな、勝手にばらして、さらに傷口を刺すのかよ。オレも長内にそういうのは期待してないよ。」

それよりお前、好きになる境界低過ぎないか。それに、アミの親父さんの代わりを期待されても、オレには無理だぞ。」

アミちゃん・・・、アミちゃん！ぼろぼろ泣いてる。こんなアミちゃん初めて。

「部長のバカ。」

「ごめん。ちょっと頭きて言い過ぎた。」

「言い過ぎたですむことじゃないでしょ、、、。もうちょっと女の子の気持ち考えてよ。アミちゃん、こんなに泣く子じゃないんだから。大丈夫？アミちゃん、、、。」

わたしがいるからね、よしよし、いいこいいこ・・・いいこいいこ。

五分ぐらい泣いたかな。

「ああ・・・もー、すっきりしたー。」
なにそれ。

「こんなに泣いたの、母さんが離婚して以来かな、・・・。ズズッ、、、、はなみるが、・・・。
嘘泣きは数限りなくやってきたけど、今日みたいな本泣きは記憶にないよ、・・・。ひっく。マ
スカラつけてなくてよかった、・・・。ああツバキ、ハンカチありがとう。ひどいオトコだよねー
、最低だよー。だからわたしに譲ってよー。」
「譲るも何も、わたし別に・・・。」
「だってー、越名くーん。」

わあ、困った顔してる。

どうして？アミちゃんなら最高じゃない。こんなきれいで面白い子、ちょっといないよ。
「そういうものでも無いんだよねー。・・・こら、ムツキー！」
「・・・なに？」
「一回でいいから、ぎゅっとして。お願い。」
ひえー。

「・・・しょうがねーな。」
「わーい。」
えー、部長立ち上がった。意外と根性と行動力有る。

目、目の前で見るの初めて。こういうの・・・。映画みたい。すてきー。アミちゃん可
愛い・・・。

「いまの長内の闇は、お前のよりもっと深い。だからほっとけないんだ。」
「うん。分かってる。・・・ありがとう、ツバキを守ってくれて。」

カシャッ！

「なんだ、今の音。」
「はいっ。長内カメラマン、撮っちゃいました。部長。」
「何だとー！」
「後で焼き増ししてちょうどい、それ。恐喝に使ってやるー。」

「あら！ あなた達そうだったの。私はてっきり・・・。」

「違うよ母さん。これは違うんだって。単なる手違い！」

「ひどいわ、ムツキ。わたしの心を弄んだのね・・・泣いてやるー。」

「オレもうやだ、こんな生活・・・。」



「ところで、長内。来たとき大変だったとかなんとか言ってなかつたか？」

「ん・・・そだ！昨日一人で部室にいたら、あの人気がやってきて、アミどこにいるって、騒ぎまくつたの。わたし怖くて怖くて。」

「何にもされなかつたか。」

こっくん。

「そうか、良かった。ごめんな。昨日は、ばたばたしてて行けなかつたんだ。」

いいよ、もう。君の所為じゃないもん。その代わりに、今日みたいな楽しい一日がやって来たんだし。

「でも、ホントに怖かつたんだよ。」

「あのくそやろう。」

アミちゃん、そういう言葉づかいはないっしょ。

「アミちゃん、しばらく学校に近付かない方がいいよ。今度無視したら、殺すとか言ってたし。」

「まあ、試験休みと夏休みの間は、バイトで忙しいから学校には行かないけど。ライブとかも近付かない方がいいかもね。いい加減忘れてくれないかな。あんなしつこいオトコ、始めてだよ。」

「自業自得だろ。」

「ツバキー、さっきの写真焼き増しして、学校中にはらまこうか。」
わっはっは。やろーやろー。

「うわー、最悪だ。最低の女に最悪の弱み握られた・・・。」

「なによ最低の女って。本当は好きなくせに。・・・撮影にかこつけて、脱げとか言ったし。」
そうそう。くっくっく。。。

「アミ。いま付き合ってるオトコ全部と別れたら、付き合っても良いぞ。」
「うーーーん。無理！」

「ま、そういうことだな。」

「くやしー。なんか今、すごい負けた気がする。アンタって、昔からそうなんだから！」

はい？

「高校で、初対面じゃなかったっけ。」

確か。

「子供モデルってね、モデルって言っても所詮は子供なの。遊びたい盛りなのよ。でも周りって大人ばかりでしょ。撮影って時間長いし、待ち時間とかも結構あるの。子供はそういうの、もたないのよ。」

「だから、カメラマンの知り合いの子供とか連れてきてさ、遊び相手にしたりするんだよ。もう十年以上前だから、顔変わってて分かんなかったけど、さっきモデルやってたときの話聞いてて、思い出した。」

オレ、こいつの遊び相手やらされてたことある。」

やらされた、、、だって。

「わたし、越名の性格の悪さで思い出した。いたいけな少女の初恋だったのに。」

わ、泣きまね。

「それ三十回ぐらいやっただろ。」

「ほんとに泣いちゃうぞ。・・・。」

「あ、ごめん。泣かないで、ボクのプリン上げるから。」

「、、、って、五回ぐらいはやったよね。」

「プリン、いっぱいあったよなー。」

「有った有った。しかも、毎回同じやつ。」

「でも、子供って飽きないんだよな。かえって、前と同じ方が良かつたりして。」

「そうそう。」

「お前の相手するの苦痛だったけど、プリン欲しさに行ってたさ。」

「どうして苦痛なのよお。」

「アミっていつもお姫さま役で、オレって家来なんだよ。王子様じゃなくて家来。馬にされそうになったこともある。」

「そうだっけ。忘れた。あははー。」

それって、今と同じってことじゃない。

「で、長内が来た用事ってそれか？」

えー、あー、うーん？

「わたし、おばさまに会いに来たの。お料理手伝ってくる。」

「はあ？」

「フィルムは、まとめてこっちの箱に入れて、明日現像に出そうっと。」
「結構撮ったね。」

モデルをしているときのアミは、その結果をみることはない。フィルムの山だろうが、プリントされた実物だろうが、アミにとってはもう終わった、事後のことだから。

「ま、赤字だな。」
「とんとんでしょ。モデル代ただだし。」

「そだな。オレも楽しかった。女の子撮らないとかいってたの、単に自信なかっただけなんだ、きっと。」

「自信ついた？」

ディスプレイの画面から目をはなさないまま、からかった。

「・・・なわけないだろ。一回やそこらで。いいように振り回されて。かえって自信なくした。」

「そうだろうねー・・・。」

「どう、そっちの。」
「うーん・・・。がんばってるけど、ありきたりのが多いな。ま、そういうのも十六歳の記念に欲しいとは思うけど。・・・デジタルって、色がなんか淡白だよね・・・。やっぱ、わたしってスッピンでもかわいいなあ、・・・これも、・・これも可愛い、でもかわいいだけ。
ムツキには、もうちょっとわたしの中をえぐって欲しかったなあ。」

そんなの、、、駆け出しに要求するな、と苦笑いした。
「なんで名前で呼ぶかな。」

「好きだから。」
なおも画面から目を離さない。

「・・・無理だ。背負えない。」
ようやく一度だけ、ムツキを見た。

「そこまで考えてくれなくていいの・・・。ムツキ、頭固いよねー。だからこういう写真に・・・なるんだよねー。」

「先生、今日はもうカンベンしてください。」

くすっ。

そんなことまで考えて、付き合ってくれた男なんてどこの世界にいたもんですか。

「わたし、汚れちゃったかなあ。」

「はあん？」

「一番信じてた親に裏切られ、ののしられて・・・、家出して友達の家転々として、中学生で水商売なんかやって、嘘もいっぱいきてきた。」

普通の中学生が、アイドルにあこがれたり、初恋したりするときに、年上のオトコだまくらかして、ご飯食べさせてもらったり、服買わせたりとか。少女を売り物にいろんなことやっちゃった。」

「楽しかったか？」

「このオトコ、こんなに可愛い女の子が、そばでココロを開いているのに、レンズの掃除してるって、どういうことよ。」

「楽しいとかどうとかより、復讐に近かったかな。大人たちに対する。親も、カメラマンも、おごってくれるオトコも。わたしの内面見てくれる人なんて誰もいなかった。まるでペットだよ。」

だから、いつも助けて、誰か助けてって、心の中で祈ってた。誰かこの境遇からすくい上げて、本当のわたしを認めてくれる人が来てくれないかって。」

アミの顔がディスプレイの光に照らされて、次々と色を変えて行った。

「あのさ、好きな服って汚れるの嫌じゃない。」

「なんか、臭いこといおうとしてる？」

一吹き出しそう！

「う、る、さ、い。 好きな服でも汚さないとわかんないことってあるんだよ。別に服ぐらい汚れてもいいじゃない。」

「汚れてないよって、否定してくれるかと思ったのに。」

「そんなこと、どうでもいいんだよ。アミはアミ。過去も含めて全部、アミはアミ。」

「ふふっ、なにいってんだか。、、、、あ、、、これいつ撮ったの、、、。」

「ん？ どれ、・・・ああ、85mmにする直前かな。ファインダー見ないで撮る練習してるんだよ。どんなにとられなれてる人でも、逆にそのタイミングにあわせて表情作るだろ。だから、気合入れる前の一瞬を、注意をそらしながら、片手でカシャカシャってね。」

「ふーん。 . . . ムツキ、 大好き。」

「ねえ、わたしと遊んでくれてた頃って、ムツキのお父さんに連れてこられてたんだよね。」
「うん。」

「やさしそうな人だった記憶あるけど、・・・お父さん失踪したって、本当なの。」
「祖父さんもね。」

「どうして？・・・か、わからないよね。」
「いや、大体見当はついてる。」
「うそ。マジで。」
「うん。」

「・・・聞いてもいい？」
「母さんには内緒にして欲しいんだけど。」
「誰にも言わない。ツバキにも。」

「物質と反物質、授業でやった？」
「理屈はわかんないけど、イメージ的には理解した。」

「うちの祖父さん、物理の研究してたんだよ。写真館やりながらね。で、身内の不幸がきっかけで靈魂の存在について考えるようになって、それを物質と反物質に当てはめたんだ。」

「靈魂と反靈魂というように。靈的な存在はなぜ増殖し続ける一方なのか、世界のバランスが崩れているのに、ひずみが出来ないのは何故か。それは靈魂が生まれると同時に反靈魂が生成されるからだって。」

「それって、安易過ぎない？ 説明にはなるけど。」

「そもそも靈魂が存在するかどうかって言うのもあるんだけどね。逆に反靈魂が存在すれば、靈魂の存在証明になるだろ。祖父さんは反靈魂を見つけようとしたんだ。ちなみに、祖父さんのノートには反靈魂をネガティブズって書いてある。」

「写真屋だから。」

「そう。安易だろ。でも、結構ハマってる名前だと思うよ。」

「で、どうやって見つけようとしたの。」
「靈魂は一般的に体内にあると思われている。だから見ることができない。靈魂が体内にあるなら、ネガティブズは体外に有るはずだ。しかも存在するモノであるからには、何らかの物質としての特性を持っていなければならない。」

「でも、どうやって？」

「心靈写真をヒントにね、電磁波の干渉によってそれを可視化することが出来ないだろうかって考えたんだ。」

「まるで、マッドサイエンティストね。」

「はは、確かに。で、試行錯誤の末にどうやらそれを作っちゃったらしいんだよ。」

「えー、マジで。」

「っていうか、そこまでの経緯や試行錯誤は、めちゃくちゃ端折って喋ってるんだけど、それを照射すると、人の周囲に何かもやのようなものが浮かび上がるようにはなった。」

「こわー。」

「でも、それがネガティブズかどうかまでは分からない。違う現象かもしれない。」

「どうやって証明したの。」

「“あらゆる物質は観測するために存在する。”」

「ええーちょっと待って待って。またわけのわかんないことを。」

「人間の目って、光がないと何も見れない。でも光が当たるって事は、そのエネルギーを対象物にあてるってこと。そのせいで、緩やかであってもそれは変化する。だから、我々が見ているものって、変化の中のある一瞬の姿である。つまり、人が見ることによって、存在は特定され確定する。」

「わかった。ぜーんぜんわかんないから、全部認める。で、結論はどうなの！」

「自分で見るしかないって結論に到達したんだよ。それがネガティブかどうか、自分がその存在を特定して、自分が認識するしかない、ってね。」

「ああ、見たんだ。それだけ？ それが失踪とどう関連するの。」

「物質と反物質が出会うと？」

「ええっと、大量のエネルギーを放出して、消滅するんだっけ。・・・・まさか。」

「そのときの記録はないんだ。いまから実験を始めるってところで、ノートは終わってるんだよ。でも、爆発とかが起こったんなら、このスタジオも今頃は空き地だろうからね。」

「多分、消滅したんだろうな。靈魂が。そういう仮設を立てたんだと思うんだ。その消滅する瞬間、自分の仮設が正しかったことを知ったんだよ。」

「そして、肉体だけが残った。運動能力はあったろうし、動物的な思考も残っていたんじゃないかなと思う。認知症が近いのかもしれない。そのままどこかへ行ってしまったのか、何日か経ってどこかに行ったのか。わからないけど、この家からはいなくなってしまったってことだろな。」

「信じられない・・・。」

「オレもだよ。話していながらオレも信じられない。単なる推測。」

「どうしてわたしに話したの。」

「長内には話せない。アミだったら大丈夫だろ。」

「だからどうして話したの！」

「いつか、同じことが起こったときに、今度こそ、その原因を伝える人がいると思ったからさ。四度目が起こらないようにね。」

部長と、おばさまと、アミちゃんとわたしがこんなふうに食卓を囲んでいるなんて、今朝まで想像してなかった。

何にもすることがないはずの一日が、こんなに忙しくなるなんて言うのも、予測してなかった。

外に踏み出すって、大事なことなんだ。鳥かごの扉は開いていたのに、わたしは外の世界を怖がって、ずっと気づかない振りをしていただけなんだ。

もちろん、安全ではないけれど、鳥籠のなかの憧れだけで終わりそうだったわたしの青春に、羽を広げて良いんだって言ってくれる人がいる

部長が私のことを想ってるって、本当かなあ。外から見ても、そんな様子まったくないし、アミちゃんはどうしてそういうこと分かるんだろう。

だって、好きな女の子の前で、別の女の子のことぎゅっとしたりする？ 普通。

なんか、いい加減なんだよね。

ぴんと来ないって言うか、うちの両親見ると、恋愛なんて嘘っぱちのような気がしてくる。アミもころころカレシ代えて、すごく適當だし。そういうのだったら、私にはただ面倒くさいだけ。

誰彼なく、にっこり愛想よく笑うなんて出来ないもん。

それにしても、毎回見たことのない料理が出てくるのすごいな。うちなんかオープンつきの電子レンジだけど、暖め以外で使ってるの見たことないよ。

「おばさま、すっごく美味しいです。うちの母は仕事優先で、家事を半ば放棄してしまってるんで、こういう家庭料理いただくのって、久しぶりなんですよ。」

「お仕事なさってるんじゃ、仕方がないわね。作るだけならいいけど、後片付けもしないといけないから。」

「本当はわたしがしないといけないんでしょうけど、わたしもアルバイトとかで忙しくて、なかなか手が回らなくて。」

「デートもな。」

「これ睦月。アミさんこんなに可愛いんだから、そういうのが有って当たり前でしょ。わざわざ口にしないの。やきもちやいてるの？」

やーいやーい、怒られた。

わあフランスパンだ。こんなホテルでしか食べたことないよ。ありがとうございます。でも自分でとりますから。

「だからさっきの誤解だって。」

もう、ぽろぽろこぼしてかっこ悪い。

「わたし、てっきり椿さんのほうだと想ってたのに、アミさんだったのね。」

「・・・もう、どっちでもいいです。」

「なんてこと言うのかしら、この子は。椿さんにもアミさんにも失礼でしょ。」

まあ、母さんはお二人のどちらでも構わないんだけど、両方は無理だものねえ・・・。それって、睦月とどうこうと言う話ではないわね。お二人とも好きよ、だからいつでもいらしてね。」

そのお言葉に甘えて、早速来ちゃったんですよ。

「なんなんだかなー。息子より、よその娘の方がいいなんて。」

たのしい。

アミのお嬢様っぷりもちょっと笑える。うざーい、とか、だるーい、とか言ってるところおばさまに見せてあげたいよ。でも、さっき自分を作って守ってるって言ってたな・・・。

普段わたしが見てるアミって、そうだったんだろうか。きしょーい、とかいってるアミって。

「ツバキはどれ作ったの？」

「サラダ。」

っていっても、野菜を指でちぎっただけ。ドレッシングは言われるままに混ぜたのを、それっぽい手付きでかけただけ。

「なんかそれって、褒めるの難しいよね。」

ほんと、ほんと。

「長内が作ってくれてるの、想像するだけで嬉しいよ。」

「きゃー、ラブだわー。じゃなくて、愛ですわー。」

はずかひー。多分顔、トマト並みに真っ赤。

「睦月も言うわね。かあさんびっくり。かあさんにもそういうこと言ってくれないかなー。」

「感謝してるって。」

「どうだか・・・。」

そんなことないですよ！

「あ、あの、ぶ、部長にはいつも勇気づけてもらって、何にも出来なかつたわたしが、写真撮れるようになって、あの、わたしも、すっごく感謝してるんです。いつか言わなくちゃと思ってたんですけど・・・。だから、その感謝してるって言うのも、本当だと思うんです。」

「ツバキよく言えたね。私もびっくりしてるよ、ツバキが写真部入つてからのこと。顔上げて、周り見ながら歩いてるんだもん。いままでずっと下向いてたのに。」

「そうだったっけ・・・。」

そうだった。足下ばかり見て歩いてた。自分に自信が無くて、人と顔を合わすと話さなくちゃいけない。人に話を合わさなくちゃいけない。愛想笑いしないといけない。それが怖くて、下ばかり見てた。

今は、自分の周りで何が起こってるので興味津々。昨日と今日で、町がどれだけ違ってるか搜すのが楽しい。自分の周りに、どれだけたくさんの光があって、影があって、色があって、形があるか、気づくのが楽しい。

「でも、肝心なことにはまだ気づいてないんだ。」

肝心なことってなんだ？

あれ、どこかで電話が鳴ってる。

「オレでるよ。」

マメだよね、彼。

ところで、アミちゃん、

「肝心な事って何？」

「そういうのは教わるものじゃないの。自分で考えなさい。」

「クスッ。アミさんがお姉さんなのね。」

「姉って損ですよ。大事な物はぜーんぶ妹に持って行かれるから。」

「そうとも限らないわよ。まだまだ、これから先は長いでしょう。」

「かも知れませんけど・・・。まあ、それはそれでつらいと思うんです。」

もう、誰かわたしに理解できるように説明してください！

「かあさん、オレ明日学校に行ってくるよ。」

うっとうしそうな顔だね。ま、せっかくの休みに学校じゃ、そうなるかもね。

「うわ、ムツキ呼び出し？わたしなら分かるけど、ムツキが呼び出しなんて。そんなにテストできなかっ？」

「おいおい。突っ込めないよ、その仮定。

写真部の部室の扉が荒らされてるんだって。警備会社から通報があって、教頭からちょっと事情を聞きたいって。今から家庭訪問してもいいんだけど、一度現場を見てからにしたいから、明日来てくれってさ。

だから、ちょっと行ってくるよ。」

「お弁当いる？」

「かあさん・・・。それ、マジ？それともボケ？」

「わたしも行く！」

「なんで長内が。」

えーと、「ふつ、副部長だから！」

「じゃあ、お小遣い上げるから、二人でお昼ご飯食べてらっしゃい。」

「らっきー。」

「くっそー、わたし明日バイトだー！」

この前のように、クルマで送っていただく直前になんでも、アミちゃんは、どうしてわたしだけバイトなのよ、と、ぶつぶつ言つてた。

多分心当たりがついて、それを気にしてるんだと思うけど、越名くんが何も言わないから、私もそのままにしておいた。

「これ、“カトル”ですよね、おばさま。おっしゃれー。、、、どうしてムツキは乗らないの。」

「かあさん。」

「いいわよー。」

「うりや！」

ドカン！ ブルブルブル・・・まだ修理してなかつたんだ。

細い道も、このこじんまりとした車はきびきびと抜けていく。エアコンの効きがわるいから、ちょっと窓を開けて、いつか、もっと遠くにドライブしてみたい。周りに家がなくて、木と草と風だけがあるところへ。

「アミちゃん嬉しそうだね。」

「うん。オッサンのベンツに乗るより、こっちの方が全然楽しい。」

「アミさん。」

「はい。」

おばさまが、バックミラーをチラッと見た。

「もう、そんなことしたら駄目よ。」

「はい。 ごめんなさい。」

あとで、アミちゃんはどうして“ごめん”て言ったのか部長に聞いてみたら、自分に謝ったんだよってついてた。師匠、よろしくご指導願います。

入り口の門扉は、もう長い間キイキイといったままだ。

玄関の明かりは落ちていて、この家は誰が帰つてくるのを期待してるわけでもない。奥のリビングの明かりはまだついていて、騒々しいテレビの音が聞こえてくる。

「ごはんどうしたのー？」

「食べてきた。」

「そう。」

作ってなかったんだ・・・。もし、作ってたら、いやみのひとつも言われただろう。

二階に上がって、部屋のベッドに倒れこんだら目じりがぬれていた。

、、、部長。

人を好きになると、寂しくなるんですね。いま、部長やおばさまや、アミちゃんがいなくて寂しいです。

随分早く来てしまった。

お、男の子と待ち合わせするなんて初めてだし、わたしメガネで遠くだと人の顔がよく見えない。なので、後から来て探す自信がない。間違って声かけたら格好悪いし。だから、早く来て待ってる。

こんな時間なのに、もうせみが鳴いてる。

でも、もし越名くんがもっと早くに来ていって、置いていかれてたらどうしよう。

「おはよう。早いね。」

「おはよう！」

よかったですー、見つけてもらえた。あー、ヘッドホンしてる。なんか、音楽聴いてるんだ。

「荷物、大きくない？ 授業もないのに。それともいれっぱな？教科書とか。」

「交換レンズとか、本体とか、ぜーんぶカメラ関係。誰もいない教室とか、ちょっと撮ってみたい。」

「すごいね。一瞬も無駄にしないんだね。」

「そういう、長内は？」

へへー。持ってきたんだー。

「さすが副部長。」

「いったいどうなってるんだろうね、部室。」

「多分中は大丈夫だよ。扉が荒らされてるって言ってたから。中には入らなかったか、入れなかつたんだ。」

休みなのに、登校する制服をちらほら見かけるのって部活かなんかかな。今までそういう経験が無かったから、こんな些細なことでも新鮮。撮っちゃおーっと。

部長は撮らないのかな。それともこういうのは、もうさんざん撮ったのかな。

「心配スンナ。周りは見といてやるから、好きなとこ撮りながら学校行こう。」

そっかあ、カメラ見ると回り見えなくなるんだ。クルマも来るし、バイクも走ってくる。あれも撮りたいこれも撮りたい。おでこに汗が・・・。めがね鼻からズルし。

「カメラ持ってるから、汗拭いたら。」

何から何まですみませんね一部長。ふー、あっちい。

「はい。カメラ。」

「どーも。あれ？」

油断も隙も無いんだから。うわー、変な顔して汗拭いてるよー。

「けすなよ。後でもらうから。」

「やだー、こんな写真。」

「オレが気に入ってるんだから、いいじゃないか。長内のは何でも欲しいの。」

あーあ、こんなの、どこがいいんだか。昨日のアミちゃんの写真と、雲泥の差だよ。そもそも比べることに無理が有るっていうのは、この場合はいわないこと。

うーーー、学校の前に坂作るなー！もとい、坂の上に学校作るなー！

「職員室、行くぞ。」

さらに二階だよー。

「いや、暑いのにご苦労さんだね。そこに座りなさい。」

小中高通じて、教頭先生と初めてあった。

「長い間教師をやってると、こういうことは、たまにあるんだけどね。できるだけ学校の中で解決しようというのがわたしの主義だ。」

なぜかというと、こういうことをするのはこの学校の生徒であることが多いからだよ。その生徒に更生する気があるのなら、表ざたにしないで解決した方がいい。本人が立ち直るためには、周囲の支援がないといけないが、冷たい視線にさらされるのは百害あって一理としてないからね。」

一学校の評判も有るからだろうな。

「分かりました。僕も先生の意見に賛成です。」

一部長の意見に賛成です。

「じゃあ、現場を見に行こうか。・・・ところで、写真部の部員集めはどうなの。」

「いまは三人です。」

「夏休みに入ると、厳しくなるね。」

「休み明けに、バーンと写真展やろうかと思ってます。それでだめなら仕方ないですね。」

「名前だけの、いわゆる幽霊部員とか、集める気はないのかね。」

「五人のうち、二人も幽霊だったら、意味無いじゃないですか。そのうち幽霊だらけになって、オカルトクラブって呼ばれるようになりますよ。」

アミちゃんが、”越名は頭固いから”とかいってたな。頭固いって言うより、曲がったことが嫌いなのかも知れないけれど。

「さてと、まあ見たまえ。こういう有様だ。」
「、、、ひっどーい。なんかむちゃくちゃに引っかいてる。読みにくいくけど、、、コロスとかシネ！とか、クサイとか書いてある。」

「なんだこれ。はっはっは、、、。」
「おかしいかね？」
「ええ、高校生にもなって、こんな幼稚なことする奴がいるとは思いませんでした。」

「誰か、心当たりはあるかな。」
「いえ、僕はありません。くっくっく・・・。」
「きみは？」
「わ、わたしも全然、見当がつきません。」

「そうか、、、。今回荒らされたのは、ここだけなんだ。だから、写真部になんらかの遺恨があるものの仕業だと思ったんだがね。」
「地味なクラブですけど、知らないうちに何かあったのかもしれません。もしそうなら、ここまでやれば腹いせにはなったんじゃないでしょうか。」
「中も見るかね？」
「ええ、一応は。」

私が、あの日泣いて帰ったそのままだった。そう思うと、この部屋をとてもいとおしく感じた。ごめんね、掃除もしないで帰っちゃって。

「整理整頓。よく片付いてるな。もっと汚いかと思ってたんだが。」
「仕事の出来るスタジオって、よく整理されてるんです。いい加減なところって、裏方も散らかってますよ。」
「では、中までは荒らされなかったと思っていいね。」
「はい。問題ありません。」
一教頭先生、部長の言う事、どこまで信じたんだろう。見かけによらずワルですよー、うちの部長ってー。

「私は職員室に戻るけど、まだここにいるかね。」
「そうですね、私物とか持ち帰りたいものがあるので、終わったら鍵を返しに行きます。」

教頭先生が立ち去った後、越名くんは部室の扉を改めて見、ため息をついた。

「こんなことするかな、普通・・・。」

「どうして、あの人のこと言わなかったの？」

「アミを巻き込みたくない。彼女はもう気づいてるだろうけど、他の人間に彼女が関連してるって知られたくない。犯人を特定できない段階で、そういう憶測を話すと、犯人よりアミに目が向いてしまう。」

「でも、アミが悪いわけじゃないじゃない。」

「あたりまえだ！ でも、彼女が今まで生きるためにやってきたことを穿り返されたら、スキャンダルになる！ 世間のバカって、みんないけにえが欲しいんだよ！」

どうしてそんなに怒るの。わたしだって、アミちゃんのこと大切に思ってるのに。いやだよそんなの。いつものぶっきらぼうだけど、やさしい部長でいてよ。

なんだか怖いよ。

「ごめん、言い過ぎた。うちの父親がいなくなったとき、母さんが悪いみたいなことを、親戚や世間からさんざん言われたんだよ。根も葉もない噂まで流されて・・・。ほんと、ごめん。」

そっか。越名くんが、家では繊細すぎるぐらい気を使って暮らしているわけが、やっと分かった。お母さんの傷ついた心をずっといたわっているんだ。

あの幸せそうな家庭って、越名くんがそうして守ってきたんだ。

わたしとアミちゃんが、あの家に心惹かれるわけって、家族がお互いを思いあう、そういうやさしさに憧れているからなんだ。

「でも、これで気が済んだのなら、、、、。」

「いや、おわっちゃんない。」

「さっき、そういうわなかつたっけ。」

「もし、落書きするんだったら、スプレーかなんか持つて来るだろう。この傷跡は、そうじゃないもの。たとえばドライバーとかそういうものでつけたやつだ。多分ドアをこじ開けようとしたけど、上手く行かなかつたんだろうな。中に入って、荒らそうとしたんだろ。」

「じゃあ、また。」

「今度は、もうちょっとでかいやつ。ATM壊すときに使うようなバールみたいなの使うんじゃないかな。そうなつたら、ドアが持つかどうか分からないな。」

わたし、いやだ。

「この部屋が壊されるなんていや。」

「オレもそう思つてるし、そんなことはさせない。でも、アミのことは表に出さないようにしないと。」

難しそうだね。

「写真部らしく、カメラで解決するか。証拠写真撮ると同時に警備会社に通報して、翌日匿名で学校に放り込む。誰が写真撮つたかの推測ぐらいすぐつくだろうけど、事を公にしたくないって言つてる学校の弱みを握つてゐるからね。しつこく追求はされないだろう。」

「越名くんがやるの？」

「問題は、いつ、あいつが来るかって事なんだけどな。」

「そんなの危なくない？電話だけして警備会社に任せれば良いんじゃないの。」

「警察じゃないんだから、捜査権は無いんだよ。しらばっくれられたらそこまでだ。忘れもの取りに来ただけとか。ほとぼりの冷めた頃に、奴はまた同じ事をする。」

「どうしてそんなことが分かるの。」

「一度覚えた快感から、人間はなかなか逃れられないんだ。それがいわゆる“悪いこと”だと分かっていてもね。特にアイツはヤク中だから、そのあたりの思考能力が低下してゐるし、所詮クスリがもたらす快感もどきから逃げられないやつなんだよ。」

アミのことだって、多分もうどうでも良いんだろ、何か、破壊的な衝動から逃げられないのかも知れない。」

—あの日のことを思い出した。

口ではわたしを脅すようなことをいいながら、誰かの目を気にするように落ち着きなく動く目。 そういえば、なんだかやせ細ってたようにも思う。 人間と言うより、なんだろう。 亡者か何かにも見えた。

「一昨日、部室にやってきたんだっけ。」

「うん。」

「じゃあ、二日続けてきたって事か。・・・なら、今晚だな。 アイツきっと。 一日待って明日、 なんてコトできる精神状態じゃ、もうないんだろう。 一度家に帰って赤外線ストロボってこよう。 それと制服も着替えて、ローファーじゃなくてスニーカーの方がいいな。」

「部長一、なんかはしゃいでない？」

「いや、全然、戦場キャメラマンとか、そんなことはこれっぽっちも考えてませーん。 母さんへの口実が、一番難しいな、、、長内とデートって事にしようか。」

デ、デート！

「、、っていうのは、駄目だろうな。 外に行くんならうちに連れて来いって言われるだろうし。 、、、そんなに驚くなよ。 そんなに意外かなあ。」

だって、わたし、デートなんてしたことないし。

「とりあえず昼メシ食べに行こう。 いまのところ、ここにいても、なーんもやることないし。」

私の、ゾウガメより短くミジンコよりは長い人生の中で、記憶にある限り男子と二人で向かい合って、こんなふうに食事したことは一度だってない。

部室で部長と二人きりになったことはこれまであったから、それにはなれた。部長ってあまり無駄口きかないから、私もぼーっとしてることよくあったし。

レンズについた埃をヒコヒコ飛ばしてたりとか、写真の雑誌を見てたりとか、・・・私も見たとき、ちょっとヌードがあったのにはびっくりしたけど・・・お、おとこのひとのもの・・・窓もドアも開け放しなので、二人っきりって言うのあまり意識しないですんだし。

「どこがいい？」って聞かれても、「何食べたい？」って聞かれても、結局わたしは何にもいえなくて。「じゃ、普通に茶店(ちゃみせ)いっとく？」っていう言葉で、やつとこさ、ふんふん、つて首を縦に振った。

部長なれてんのかな、こういうの。カメラオタクのくせに。

うー、スパゲッティだと安全だと思ったのに。スプーンついてきたよー。これスプーンの上でくるくるしろってことだよね。わたしそんなことして食べたことないのに。
困ったなー、このスプーン。

「無理に使わなくていいよ。イタリアでも南のほうではスプーンなんて使わないらしいよ。・・・あれ、北だったかな。」
そなんだ。危ない危ない。

片手だったら大丈夫。くるくるくるくるくる・・・。あれ、デカ！巻きすぎた。口に入らないよ、これじゃ。

「長内、思いとどまれ。なかったことにしてやるから、それ口に突っ込むな。」
よく見てるなー、部長。油断もすきもないよ。

はあーやっとアイス・コーヒーにありついた。わたし、かっこワルー。なんだか、ちゃんと食べた気がしないなー。

「部長って、こういうのよく来るの。」

「質問の意図がよく分からぬけど、バイトで写真撮影の手伝いとかしたあと、モデルさんがご飯付き合いなさいって誘ってくれたりする。」

「へー。」

「高校生ぐらいって、なあんか、ショッちゅうお腹すかしてるってイメージあるのかな。ここも、何回か来たよ。近くだから。どっちかっていうと、一人ってこういうとこに入りづらいのかもね。だったら、僕みたいにあんまり業界に関係のない人間を連れて行こうとか、そういうのかもしれない。誤解されたら困るとか。」

ふーん、来てるんだ。ふーん。

アミちゃんも、越名くんも、大人の世界と関わりがっていいなあ。わたしなんかいつまで経っても子供でさ、落ち着いてスパゲッティも食べられないし。

「オレなんかと来ても、楽しくない？」

ぱちくり。突然、なんでしょうか。

「オレって、写真以外の話なんてこれっぽっちも出来ないし、ま、もともと口下手だから、女の子を楽しませるって、どうしたらしいか分からなくてさ。長内、退屈かなと思って。」

楽しいとか、楽しくないとか・・・って心の中で言っても伝わらないでしょ、わたし。ちゃんと言葉に出していわないと。変わるんだって、決めたんだから。

「越名くんというのは、別に嫌じゃない。」

あー、違う、そんなこと言いたいんじゃない。どうしてー、どうしてそうなるの、わたし。

「そっか、ならいいけど。」

もう最悪。そんなこと伝えたいんじゃないのに。

「ムツキッ。」

「こんにちは、水谷さん。」

ひげのおじさんだ。

「もう夏休みだろ。バイトしに来いよ。それともなにか、そこのお嬢さんとのデートが忙しくて、これないとか言うんじゃないだろうな。」

きゃーー。わたしとデートなわけないでしょ。「わたし」と「デート」って結びつかないよー。だって、なに話せばいいのか全然わかんないもん。

「違いますよ。単なる片思いなんで、今日はお情けで昼メシ付き合ってもらったんです。いつから行けばいいですか。」

「明日っからでもいいけどな。ま、あとで電話しろや。人の恋路を邪魔するものは、豆腐の角に頭ぶつけて死んじまえー、ってな。まあ、今日ここで見たことはユウには内緒にしといてやるよ。」

「なに言ってんだか。」

片思い？ユウさんて誰？

「ユウさんて言うのは、モデルの人。可愛がってもらってる。」

「いるんじゃない、そういう人がちゃんと。モデルさんだから、きれいな人なんでしょ」

あーんもう、そういうこと言うんじゃないでしょ。なんかすっごくいやみな女だ。越名くんが誰と付き合っててもかまわないじゃない。わたしが口出しすることじゃないのに。

「きれいって言うか、たしかにそうだけど・・・オトコの人だよ。性格は女っぽいけど。」

?????えー！

「あの業界、そういう人多いの。モデルって基本的にナルシストなんだよ。」

わたしのゾウガメより短くミジンコより長い人生経験では、もう、理解できません。

「・・・片思いって言うのは？」

「オレが長内に片思いしてるってこと。」

そんなこと、

「急に言われても、わたし、どうしていいか分からない。越名くんのこと、嫌いじゃないけど、そういう経験ないし、よくわからないよ。」

「うん。別に付き合ってとか、カノジョになってくれって言うつもりないんだよ。

いまの長内に、そんなの無理だろうし。でも、だれかが自分のことを大切に思ってくれてるって知ってたら、あったかくなるだろう。だから伝えときたいんだ。それに、いざというとき心残りにならなくていいから。」

アミちゃんみたいに気軽に跳べたら、越名くんと付き合ってもいいよって言えたかもしれない。

でも、わたしはそういう女の子じゃなかったんだ。ひょっとすると、この瞬間にわたしは二度と来ない幸せを逃したのかもしれないなんて、そのときは分からなかった。こういうのって、いろいろ経験してみないと分からない。しかも、神様。わたしには早すぎるよ。

とはいえる、わたしの心臓はどきどきとし、鏡を見なくても分かるぐらい顔は赤くなっていた。

「さてと、機材そろえて出直してくるかな。」

「何時に来るの？」

「閉門前に入るから、六時ぐらいかな。それからはひたすら潜んで待つ。」

「さっき言ってた、赤外線何とかって言うのは、何？」

「赤外線ストロボ。赤外線を照射するフラッシュ。赤外線だから人には見えないけれど、それようのフィルムを使えばばっちり写る。相手に悟られないように、証拠写真を撮るには最適。」

「へえー、目に見えないのに写るんだ。すごいね。じゃあ、駅前に、五時四十五分ぐらいに集合かな。」

「なに言ってんの。」

「へ？」

「行くのオレだけだぞ。長内は家にいろ。危ないから。」

「そんなあ。わたしも部室守りたい。なんかできることあるよきっと。」

「だめ。長内は家にいるの。わかった？」

部長のバカ。

これ以上言い合いをしても、堂々巡りにしかならない。

だから、分かったことにして、ひとまず家には帰ることにした。

買い物にでも出ているのだろうか。母親はいなかった。冷蔵庫からパックの麦茶を出して、コップで飲む。夏は太陽が高く南中するから、家の中は冬より暗くなるって越名くんが言ってた。

スタジオのバイトで、外で人物の写真撮ることがあるけど、夏の直射日光の下で長時間レフ板持つてると死にそうになるって言ってたな。ふふーん。いい気味だ。なんてね、ゆがんだ性格のわたし。彼に好意を持ってもらう資格なんてないよ。

二階に上がって、エアコンをつけて、制服を脱いでベッドに倒れこむ。窓を閉めていても、蝉の声がする。暫らくすると部屋がひんやりしてきた。このまま昼寝したら、風邪引くだろうか。

長内 椿は、家にいても何の意味もない。

寂しかった。

だれかが自分のことの大切に思ってくれてるって知ってたら・・・、って彼は言ったけど、それを知って余計に寂しくなった。それは多分、伝えそびれて行き場をなくした、自分の本当の気持ちに気づいたからかもしれない。あなたがいないと、私は寂しい。あなたに拒まれると私は切なくなる。

長内は家にいろ・・・そういわれて、寂しさに気がついた。例え危険でも、オレと一緒にいろって言われたかった。抱き寄せたその手で突き放すなんて、ひどいよ。

もちろんそれは我が儘。わたしがその気持ちに上手く応えられないのを知ってて、それでも彼がわたしのことを思っているといってくれたのも、危ないから家にいろといったのも、全部彼の優しさ。

それは理性で分かっていたけれど、わたしの幼い感性は、初めての経験にとまどい、混乱し、もうどうにもとまらなかった。

暑いな。梅雨を過ぎると夜でも余り気温が下がらない。おまけにムシムシするから、じっとしてても汗がにじんでくる。

わたしだって、警備会社に電話ぐらいできる。門扉にはってある緊急の電話番号もケイタイに打ち込んだ。落ちついてやれば通報なんてどうってことないよ。

とはいものの、彼と別行動で潜んでいられるほど、わたしは度胸が良くはない。今の内に、彼を捜した方がいいな。

もし、証拠写真を撮るのなら、部室が見える場所。しかも顔が写ってないと話にならないから、多分この階段の辺りにいると思うんだけど・・・居ないなあ。まだ来てないのかなあ・・・それとも今日は取りやめにしたんだろうか。

三十分ぐらい前までは、下校前の生徒の声もしたんだけど。今は何も聞こえない。夕日も山の向こう側に沈んでしまって、窓から差し込む薄明かりで、周囲がようやく青く見えるぐらいだ。バイクのけたたましい音が、運動場の外を通り過ぎていった。

こんな時にアイツが来たらどうしよう。

学校に行けば、越名くんとすぐに会えると思ってたのに。わたしばかだ。みつからないようにどこかに潜むって言ってた。すぐに分かるようなところにいるわけがない。

一人でこんなところにいるの初めてだし・・・。夜の学校、怖い。暗いって言うだけで、どうしてこんなに怖くなるんだろう。非常出口と、火災報知器の赤い光があるだけまだましって感じるなんて。あんなの役立たずだって思ってたのに。

階段の隅っこに小さくなってるしかない・・・いま、歩いて出て行って、あいつとばったりあつたら・・・、逃げても結局追いかけられるて捕まるだろうし。朝までこのままでいるの? そうしたら、うちの家族、わたしがいないことに気づくだろうか・・・。

こんな時間に、何も言わずに外にいたことってないけど、母さんは最近わたしが何してようと無関心だ。またアミちゃんと遊びに出てるとでも思ってるんだろう。それでも、中学のときは、どこにいるのってケイタイぐらいはかかってきたのに・・・。

越名くん、来てよ。肝心なときにいつもいないんだよ・・・。そばにいてほしいときに、いつもいないんだから。

いまのなにっ！

……蛾かあ……びっくりしたあ……。非常灯にぶつかって……何度も何度も……鱗粉をまきちらかしながら……また非常灯にぶつかっていく。バカな虫。

何度も彼の好意を見逃してきた。見て見ない振りをしてきた。自分に自信がもてなくて、自分にはそんなことが起こるはずないって思い込もうとして……、もしも彼を受け入れて、それが壊れてしまったとき、自分がどれだけ傷つくかを恐れてた。めがねの後ろの世界に逃げ込んでた。

……いま音がした。ドアの開く音だ……。部室のほうだ。あいつが来たんだろうか。どうしてこの瞬間まで気づかなかつたんだろう。どうやって、ここまで入ってきたの、廊下？窓？壁でもすり抜けたの？

歩いてる、こっちに向かってくる、どうしてこっちに来るの、わたしに気づいたの？わたしずっと座ってただけなのに。どうして感づかれた。部室こっちじゃないのに。階段上がってきた。

ペンライト持ってる。光が上がってくる。

しまった！ 足滑らせて音がした。

やめて、来ないで、照らさないで！ まぶしい！

「長内？」

……越名くん。

「来るなって言ったのに。……っていうか、よくこんなところに今まで潜んでたな。長内らしくない。」

「怖かった。」

って言ったあとは、涙がぼろぼろと出てきて止まらなかった。越名くんは膝について、わたしの頭をあやすように抱き寄せた。

「どこにいたの？」

「部室の中だよ。」

「鍵は？」

「職員室に鍵返しただろ。そのときに合鍵作っといたんだ。文化祭前とかで、休み時間の十分とかでも、写真焼きたいときあるかもしれないから。」

「怒られるんじゃないの。」

「だろうな。でも、そういうわがままが許されるように、勉強もまじめにしてるし、生徒会関係の仕事もして、先生に顔売ってるんだよ。そもそも九月に五人集まらなかつたら廃部なんて、絶対阻止しないと。展覧会やって、実績作って、先生説得して延長してもらうんだ。」

このひと、すごすぎるんだ。だから、わたし、彼の前では自信なくすんだ。

「これからどんなことが起こるかわからないから、学校の外まで送るよ。」

「そんな！せっかくい今まで我慢してたのに。」

「長内はよく分かってないんだ。薬物中毒って言うのはね、単にクスリの快感を求めるだけじゃないんだよ。強迫観念に襲われたり、被害妄想を抱いたり、他人に暴力を振るったり。自分が快楽を得るか、苦痛から逃れるためだったら何でも出来てしまうようになるんだ。理性の歯止めが効かない暴力ってどんなになるか、僕にも想像がつかないし、長内を守りきる自信なんてないんだよ。」

「いやだ。越名のそばにいる。」

そんなに困ったって顔で見ないで。

「まずったなあ。どっかで間違えた。長内が急にこんなふうになるなんて、・・・・でも、なんにせよもう手遅れみたいだな。」

窓ガラスが割れる音がした。



鍵が回され、金属の窓枠が動いた。人影が黒く見える。一人じゃなかった！三人。わたし全然分かってなかった。てっきり一人だと思ってた。

開いた窓から一人が入り込んだ。廊下に飛び降りて、足の下でガラスがパリンと音を立てて割れた。手元でライトがゆれてる。

「なあんだ、昨日のままか。修理してたら、もう一回傷だらけにしてやろうと思ってたのにな。」

「さすがにドライバだけじゃ、鍵開かなかったな。」

「昨日の今日だからな。けど、この中に、ほんとに金目のものとかあるのかよ。」

「見たんだよ。パソコンとかも置いてあった。売ればいくらかになるさ。」

「もう、まともなところは雇ってくれねーからな。こうでもしないとクスリ代払えねーし。」

越名くんがカメラを持った手だけを伸ばした。

ドアの隙間に、何か固いものを突っ込む音がする。

彼の指がかすかに動いて、腕を元に戻した。ホントだ、何にも光らなかった。けれど、彼が腕を戻したって事は、何か撮れてるって事だ。慎重にフィルムを巻き上げて、もう一度手を伸ばした。

しまった！ケイタイがぶるぶる震えだした。家からだ。どうしてよりによってこんな時に。

「おい、なんかそっちにいんぞ！」

やばい！

「だれだ、こらあ！」

「オレが飛び出して、注意をひきつけるから、長内は上に上がって隠れてろ。いいな。」
う、うん。

ごめん越名くん。わたし、足引っ張ってばかり。

「待てこらあ！」

追いかけていった。走る音が校舎の端に遠ざかっていく。でも、このままじゃ、越名くんも逃げ切れるかどうか。

いまのうちに警備会社に電話しよう。

「そういうことを、してもらっちゃ一困るんだけどな。このガキ。」
残ってたの！ 追いかけて行ったんじゃないの！

「あほかお前は。あのバカが気を引くために飛び出したんだろうが、じっとしてりや分からなかつたのに。こんなケイタイなんかで連絡取られちゃ困るんだよ！」
取られた！

「まあ、こんなもんでも売れば金になるかもな。イッコ儲け。ついでに、お前も体売るか。」
痛い、腕痛い。乱暴にしないで。めがね落ちた。下のほうで、ぱりって、嫌な音した。

「あんま動くと、ナイフが刺さるぞ。ざっくりとな。こいつはアーミーつって、兵隊が人を殺すためのナイフだ。よく切れるし、このギザギザのところで切り裂けば、傷口は縫えねえときてる。」

こんなに暗いところでも、ナイフはぬめっとよく光る。こんな大きいの刺されたら、死んじゃう。

「ま、顔は止しとこう。売れなくなるからな。・・・胸か、腹はやばい、足か・・・何にしても生身に刺すのって初めてだからな。ゾクゾクするぜ。」

狂ってる。越名くんの言った通りだ。

「お前ら、オレをなめすぎてるんだよ。何だってやってやるぜ、オレはよ。」

廊下を走る音と、追いかける男たちの声が学校の中に響いていた。

“あ、くそ。なんだ！眼が見えねー。”という声がかすかに聞こえた。

足音がひとつ、こっちに戻ってきた。

「長内どこ？逃げるぞ！」

「ここだ。クソガキ。」

懐中電灯の明かりの中に、肩で息をする越名くんがぼんやりと見えた。

「はあ、はあ、はあ、・・・。」

「おい、そいつ光るやつ持ってるぞ。眼くらました。」

「ほー、じゃそいつを手放しな。でないと、この女が血まみれになる。」

越名くんが右手に持ったフラッシュを廊下に置いた。

「そうか、証拠写真でも取ろうとしたんだな。写真部だからな。お前らつくづくバカだな。発想が笑わせるぜ。」

越名くん、ごめんわたしのせいだ・・・。

「さてと、どうすっかな。まずこの女を刺すか。それともそいつをぼこぼこにした後でいたぶるか。」

「おいー、さすがに刺すのはまずくねーか。」

「オレは、ここまでコケにされて、黙ってられるほどお人よしじゃねーんだよ！」

わたし、死ぬの！

「思いとどまるんなら今のうちだよ。」

「なに言ってんだ、オマエ。」

「いまなら、まだ引き返せるっていうことさ。」

「自分の立場が分かってねーな。オマエはいまから半殺しにされて、この女はぼろぼろになった上で売られるんだ。なんならお前にもいい客紹介してやろうか。クスリ代稼ぐには一番手っ取り早いんだがな。」

「じゃ、しょうがない。いまからいいもの見せてやろう。一生の思い出になるやつ。」

越名くん何するの。それ、フラッシュ？さっきのと同じ？

「おまえ、そういうの何個持ってるんだ。捨てろって言っただろう。」

「いや、これはさっきのと形は似てるけど全然違うもの。」

「うっせー！おい、こいつやっちまえ！」

「いや、オレは殺しまではやりたくねーよ・・・。」

「これはね、オレの祖父さんが作った発明品で、それを携帯可能なように電源部分を写真用のバッテリーにしたものなんだ。ネガティブ・オプティマイザーっていってね。いまのところ、世界にこれ一個しかない。だから希少すぎて価値がつけられない。」

「へーいいこと聞いたぜ。売れば高く売れるってことだな。そいつも貰おうか。そいつと交換で

ことか、このションベン臭いガキと。」

「たとえそういうことだとしても、使い方が分からないと、売ることも出来ないだろ。いまから教えてあげよう。」

「両方いただきだな。」

「ま、いいさ。そうしたければ。」

「あんた、靈魂で信じるか？」

「……くっくっく。なんだよ、オカルトかよ。今日、こんな状況でオカルトの話なんてきかされるとおもってなかつたぜ。学校の怪談か？ よう、クソガキ、こいつオマエを助ける気ないみたいだぜ。」

「信じてないか。じゃあ、見せてやろう。これはそういう機械なんだよ。靈は存在するんだ。でもそれが見える人と、見えない人がいる。そこには何か、人としての個体差があるんだろうけど、この機械は、それを誰にでも見えるようにする機械。

体の周囲にまとわりついている靈は、固有振動数が高すぎて普通は人の目には見えないんだ。でもこの機械はその振動数の倍数と等しい可視光線で干渉をおこさせ、振動を増幅させる。光の波が一致するところだけが強調されて、縞模様のように浮かび上がるんだ。」

「なんだと？」

「口で言っても分からぬだろうね。じゃ、実際に眼で見てもらおう。キミの靈魂だよ。」

メガネをなくしたわたしの目には、彼の右手がゆっくりと上がりその先で何かがあわただしく明滅しているのがぼんやりと、かろうじて見えた。

「うわっ、まじかよ！」

「青白く光ってる！」

という声が、周りから聞こえた。そういえば、わたしの周りにぼんやりとした燐光のような光が有るようだ。

オトコの息使いが次第に荒くなり、胸が激しく上下した。それに合わせて、光が脈打つように明滅している。

「おい、もういいよ。それ止めろよ。気持ち悪いよ。やめてくれよ。」

また誰かが言ってるけど、良く見えない。

これ、越名くんが言ってた、ネガティブズの光なの。

「まだまだ。まだだよ。本人がちゃんと見なくちゃね。これは意味ないんだよ。」

頭の上で「アー……。」といううめき声がした。

「ほら、うしろだよ。」

わたしを抑えている男の体が、わずかに後ろによじれる気配がした。そして、そのよじれは、ま

すます強くなっていく。

「キヨ、キヨウヘイ！ おまえ口から光が！ お前の口や鼻から、光る煙がでてる！」

「何か、後ろの光に吸い込まれてるぞ。」

「ウッ、ヲヲヲヲヲ…………。」

屠殺される獣のような吠え声が、男の口から発せられて、深いトンネルに吸い込まれるように消えていった。

わたしを捕まえていた腕の力が急速に弱まり、ナイフが床に落ちる乾いた音を聞いた。

「き、消えた！ひ、光って消えた！キヨウヘイ、おいキヨウヘイ！」
わたしはオトコから体を振りほどき、越名の胸に飛び込んだ。

「あんたらも見るかい？」
彼が腕を向けた。

「や、やめてくれ、悪かった、オレたちが悪かったから、やめてくれ！」
「なら、今すぐ出てけっ！さもないと……。」
ばたばたと足音がして、窓から飛び降りる音がした。

「メガネ落としたのか、長内。」
こっくり。

「ああ、あれだ。ああ……ひびって言うか、割れてんな。」
そんなこと、今はどうでもいい。

「たすけてくれて、ありがとう。」
と言った瞬間、膝が急に落ちて、体の震えが止まらなくなった。越名くんが抱きしめてくれた。

「この人どうなったの。」
あの男はただ闇を見ながら、ペったりと座っていた。背中が曲がり、顔を突き出して、口からはよだれが垂れていた。

「魂が消滅したんだ。でも体は生きている。」
「どうなるの？」
「分からぬ。魂が消えたその後どうなるか、まだ誰も知らない……。いや、一人だけ知ってるやつがいる。」
「だれ？」
「オレさ。祖父さんもオヤジも、失踪した。その程度のことだけどね。」

「彼、どうするの。」
「このまま置いていくよ。あと三十分もすれば、警備会社が定期便でやってくるから、その人たちに見つけられて、この一連の事件を誰が起こしたのかも分かるだろう。動機は永久に解明できないだろうけどね。」

あのね、越名くん。わたし、あなたに言いたいことが有るんだけど。わたしの本当の気持ち。

「他の二人は共犯というより、ただ面白がってついて来ただけみたいだな。オレたちもずらかろうぜ。痕跡残さないようにな。・・・・なんにしても、この件にアミを巻き込まないですんでよかったです。」

アミちゃん・・・。

「アイツもオレも、一度は人間てものに絶望してる。ようやく立ち直ってきたのに・・・、だから、ちゃんと守ってやらないと。」

そういう言葉を聞いた後で、わたしの気持ちをコクハクするなんて、とても出来なかった。わたしだけを見て、なんて言えるはずがない。

彼らがあけたままにした窓から飛び降りて、暗い自転車置き場のそばを彼に手を引かれて走り抜けた。

その裏の植え込みの裏に金網の裂け目があって、
「ここ、脱走してコンビに行くときによく使うらしいよ。正門回るより近いから。」
っていうところから、学校の外に出て、ようやく胸のどきどきが落ち着いてきた。

「さっきケイタイかかってたろ。」
「ごめん、バイブにしてればいいと思ってた。警備会社に電話しようと思ってたから。」
「ダメダメ、素人は困ったもんだよ全く。」
じゃあ、自分は何様なのよ。

「とりあえず食べる？お腹すいてるだろ。」
うわ、チョコバーだ。

「もしもの時のために、用意しといたんだ。下手すりや明日まで籠城だったからな。」
「明日また呼び出し食らうかもしれないけど、今度はオレだけで対応しとくよ。その調子じゃ、
周りのものよく見えてないだろ。」

ちょっとかっこ悪いけど、ひびの入っためがねでもないよりはまし。ときどき風景がズれて見えるし、明かりがにじんで見える。めがね代かあ。母親にいわないと。

あ、またケイタイ。

「もしもし……カレシと一緒に高校……うんデート。だからデート。何回言わせるの。うん九時には帰る。大丈夫そういう人じゃないから。……あ、そうそう、メガネ落としちゃった。うん、もう古くて度もあってなかったし。うん。よろしく。」

はあ……。

「カレシってオレのこと？」
聞かないで。

「デートってこれがか？」
あ一一一。

「九時まで付き合ってか。」

いやその・・・。

「なんかさ、もうちょっと思い出にしていいこともしようぜ。なんてったって、初デートだからな。」

結局、家に帰ったのは十時だった。

玄関開けて無言で二階へ上がろうとしたら、母親に、今何時だと思ってるの。手のかからない、いい子だと思ってたのに、こんなことするなんて。こんどやったら夜は外出禁止にするからね、って叱られた。

手のかからないいい子。そんなこと思ってたんだ。叱られたの何年ぶりだろう。そのあと、お風呂に入って、出てきたら、明日メガネ買いに行こうって言われて、一人で行けるっていいたら、たまには親に付き合えっていわれた。ちょっと鬱陶しかったけど、でも、越名くんとお母さんのこと思い出して、自分はなんて努力してこなかったんだろうと、ちょっと反省した。

私はまだ、人間に絶望してたわけじゃない。

今日の夜起こったことが、まだ信じられない。できればなかったことにしたい。

夜の闇が怖かったこと、ナイフを突きつけられたこと、越名くんの言うことを聞かずに、越名くんを危険な目にあわせたこと。彼が魂を失ったこと・・・。全部、自分が空回りしたことが原因であり結果でもある。

それをいうと、彼が、現実に起こったことの原因ていうのはひとつじゃない。いろいろなことが絡まりあって、今につながっている。アミがあいつと付き合わなければ、あいつが変なクスリに手をださなければ、そもそもアイツが生まれなければ・・・。そういうのが絡み合っていまが成り立っている。

それに手を下したのはオレなんだから、長内は気にする必要ない。責任はいずれ取ると思うよ、って慰めてくれた。

でも、彼が責任を取る。それを私は聞き流してしまった。人の言うことの全部を、その意味まで考えて聞けるほど、人生を経験してなかったから。

越名くんが学校に再び呼び出されたのは、その翌々日のことだったらしい。

アイツは警備会社の人に発見され、ひっそりと警察に引き渡された。窓ガラスを割ったことによる器物損壊。大型のナイフを携帯していたこと。バーでドアをこじ開けようとしたこと、などが罪状として挙げられたが、刑罰自体は大したことにはならない。

それより、過剰の薬物摂取により著しく心神が耗弱しており、まず更正施設へ送られることになるだろう。

犯行の動機は分からなかったということが、彼に告げられたということを電話で聞いた。

熱いアスファルトの上をサンダルで歩いていると、サンダルの底が熱くなつて来る。この道を歩くのは三回目だ。見覚えのある男の子たちが、チョコレート色になつて遊んでいるのが面白い。

今日はちょっと気取つて、ワンピースにしてみた。腰のところに、同じ生地を使った細いベルトがついている。

家を出る前に、エアコンを思いっきり効かせて、寒くなるぐらいに体を冷たくして出かけた。その効果もあと数分で切れるだろう。なにより今日は無風状態。日の光が垂直に降り注いで、アスファルトの温度をどんどん上げている。もう一時間もしたら、アスファルトがとろとろ溶け出すんじゃないかな。

その前に彼の家に着かないと、せっかくのワンピースが汗でびしょびしょになつてしまう。

今日は彼のバイトが休み。

毎日来いって言われてるけど、そもそも定休日があるし、それに写真も取りたいからって週五日にしてもらつてるつていってた。週に五日もバイトしてたら、わたしと会う機会なんて殆どなくなるんだよ、分かってるの？

しょうがないからこうして、来てあげてるけど。

あ、家の前に大人っぽい女の人が。黒い大きめサングラスで、髪をアップにまとめて、ちょっと濃い目のルージュ。襟の広い白のブラウス。かっこいいー、腰細ーい……って、どうせアミちゃんね。

「ツバキー。」

アミちゃんは大好きなんだけど、こういう友達を持つつて、苦労するよね。どんなに背伸びしても、日があたらない。ひまわりの下のタンポポみたい。で、どうしてアミちゃんがここにいるの。

カレシとデートは？ アルバイトは？

「わあお、ツバキどうしたの、それ。」

「ちょっとしたイメチェン。ニュー・ツバキちゃんへのささやかな一步。」

「いいんじゃない。すごく明るい感じになった。ボブもなかなか似合ってるよ。それで彼に迫っちゃえ。」

迫るって、何を迫るのですか？ わかりません、先生。

「アミちゃんバイトは？」

「この暑さのせいで、親戚に不幸があったからって、お休みさせてもらっちゃった。」

そうやって、今まで何人殺したの。っていうか、代わりに、セミ死んでくれ。

「いらっしゃい、椿さん。中に入って。」

はーい、じゃなくて。ちゃんと口に出す。

「はい。」

はあっ。涼しい。

「よう、いらっしゃ……。」

なによお。微妙なところで止めるなよお。

「長内、メガネは？ まだ直していないのか。」

「コンタクトにしたんだけど……。」

え、ウソ、何か嫌な予感がする。何首かしげてるの。次のー言聞きたくなーい。

「……オレ、ひょっとすると、めがね萌だったのかなあ。」

そんなー。

「えーん、アミちゃん。わたし、失敗した？ねえ、わたし、しくじったかなあ？」

「そんなことないよ、よしよし。」

ムツキのばかー！

「ネガティブズ」

<http://p.booklog.jp/book/73051>

写真集「空と僕と自転車とni」

<http://p.booklog.jp/book/72996>

写真集「空と僕と自転車と」

<http://p.booklog.jp/book/72092>

写真集「空と椿と木蓮と、そして花水木」

<http://p.booklog.jp/book/71344>

写真集「空と雲と、ぜんぶ鳥のいたずら」

<http://p.booklog.jp/book/70700>

写真集「空と雲と、ときどき春の野を行く」

<http://p.booklog.jp/book/70137>

写真集「空と月と、夜桜デート」

<http://p.booklog.jp/book/69415>

写真集「空と木と、ときどきの梅暦」

<http://p.booklog.jp/book/68722>

写真集「空と窓と、京都の路地は奥に深いです ni」 <http://p.booklog.jp/book/65536>

写真集「空と窓と、京都の路地は奥に深いです」 <http://p.booklog.jp/book/64153>

写真集「空と木とたまに月」

<http://p.booklog.jp/book/62540>

写真集「からくれないに」

<http://p.booklog.jp/book/61473>

写真集「空と雲と、ときどき月」

<http://p.booklog.jp/book/36294>

写真集「夢みる桜」

<http://p.booklog.jp/book/45286>

「黄金の麦畑」

1.Largo

<http://p.booklog.jp/book/58662>

第1回 ～ 第41回

「黄昏の王国」

イーリアス編

<http://p.booklog.jp/book/49612>

アリシア編

<http://p.booklog.jp/book/51254>

— 僕カノシリーズ —

「僕が彼女に殺された理由（わけ）」

<http://p.booklog.jp/book/31906>

「僕と彼女の選択の事由（わけ）」

<http://p.booklog.jp/book/35498>

「僕と彼女はそれしか答えを見つけられなかった。」 <http://p.booklog.jp/book/36101>

「僕と彼女はそれでも答えを探し続ける」

<http://p.booklog.jp/book/36617>

「僕と彼女と複雑な関係者たち」

<http://p.booklog.jp/book/37238>

「僕と彼女と単純な関係式」

<http://p.booklog.jp/book/37731>

「僕と彼女と校庭で」

<http://p.booklog.jp/book/38409>

「僕と彼女と校庭で 夏」

<http://p.booklog.jp/book/38977>

「僕と彼女のアリア」

<http://p.booklog.jp/book/46524>

「僕と彼女のインベンション」（次回）

— その他 —

傘がない

<http://p.booklog.jp/book/69798>

夕暮れの赤ちょうちん

<http://p.booklog.jp/book/42024>

いもうと

<http://p.booklog.jp/book/40794>

サマータイム・ブルーズ

<http://p.booklog.jp/book/34054>

危険なドライビングマジック

<http://p.booklog.jp/book/33630>

デフラグメント

<http://p.booklog.jp/book/33116>

インフルエンス あのころの僕たち

<http://p.booklog.jp/book/32752>

花舞い、名残り雪

<http://p.booklog.jp/book/32187>

詞画集「ただ憧憬れだけを」

<http://p.booklog.jp/book/34472>

画集 「彼と彼女の表紙画集」

<http://p.booklog.jp/book/39345>